

川島本町葬祭会館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

川島本町遺跡

2017年9月

株式会社ベルモニー
高松市教育委員会



出土遺物集合写真



遺跡遠景（上佐山より）



SD1001・SD1002 完掘状況（南から）

例　言

1 本書は、川島本町葬祭会館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、川島本町遺跡の報告を収録した。

2 発掘調査地並びに調査期間は次のとおりである。

調　査　地：高松市川島本町字流田 56 番、57 番 1、77 番、79 番

発掘調査：平成 28 年 7 月 4 日～同年 8 月 24 日（実働 37 日）

整理作業：平成 28 年 9 月 1 日～平成 29 年 6 月 30 日

調査面積：約 886 m²

3 発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当し、費用は土地の所有者と事業者である株式会社ペルモニーが負担した。

4 現地調査は高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課 非常勤嘱託職員 中西 克也・杉原 賢治が担当し、同課文化財専門員 波多野 篤が補佐した。整理作業は、遺構については現地担当者と協議して波多野が行い、遺物は中西が担当した。なお、遺物整理のうち石器については、同課文化財専門員 舟築 紀子が補佐した。

5 本書の執筆は、第 3 章第 2 節の遺物を中西、それ以外を波多野が担当した。また、編集は、同課非常勤嘱託職員 森原 奈々の補佐を得て波多野が担当した。

6 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関から御協力と御教示を得た。記して厚く謝意を表する（五十音順、敬称略）。

香川県教育委員会、株式会社 中塚工業

7 発掘調査に関連して、以下の業務を委託発注により実施した。

遺物写真撮影　　西大寺フォト

8 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第Ⅳ系（世界測地系）に従つた。また、方位は座標北を示す。

9 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

SK：土坑　　SE：井戸　　SP：柱穴　　SX：性格不明遺構　　SD：溝

10 本書で使用している挿図の縮尺は、遺構図は 1/40・1/100、土器の実測図は 1/4、石器の実測図は 1/2 を原則とした。また、写真図版における遺物の縮尺はすべて任意である。

11 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章	調査の経緯と経過
第1節	発掘調査の経緯.....1
第2節	発掘調査の経過（調査日誌抄）.....1
第3節	整理等作業の経過.....2
第2章	地理的・歴史的環境
第1節	地理的環境.....2
第2節	歴史的環境.....4
	川島本町遺跡の既往の調査成果.....4
第3章	調査成果
第1節	試掘調査の成果.....7
第2節	発掘調査の成果.....7
第4章	総括
第1節	事業地周辺の堆積環境.....41
第2節	主な遺構・遺物について.....41

挿図目次

図1 調査地位置図.....2	図15 第2遺構面 土坑・溝 実測図 (1/100・1/40).....25
図2 微地形分類と調査地の位置 (1/24,000)3	
図3 周辺の遺跡5	図16 SK1001 出土遺物実測図 (1/4・1/2)27
図4 層序に関わる事業地周辺の調査成果 (1/1,000) 図17 SK1002 出土遺物実測図① (1/4)28	図17 SK1002 出土遺物実測図② (1/4・1/2)29
.....6	図18 SK1002 出土遺物実測図③ (1/4・1/2)30
図5 調査区位置図7	図19 SK1004・1005 出土遺物実測図 (1/4・1/2)31
図6 調査区東壁断面図 (1/60)9	図20 SD1001 上・中層出土遺物実測図① (1/4)32
図7 第1遺構面 平面図 (1/200)11・12	図21 SD1001 上・中層出土遺物実測図② (1/2)33
図8 第1遺構面 土坑実測図 (1/40)13	図22 SD1001 下層出土遺物実測図① (1/4・1/2)34
図9 第1遺構面 井戸実測図 (1/40)14	図23 SD1001 下層出土遺物実測図② (1/2)35
図10 性格不明遺構実測図 (1/100・1/40)15	図24 SD1001 出土遺物実測図 (1/4・1/2)36
図11 第1遺構面 構築実測図① (1/100・1/40) 17・18	図25 SD1002 出土遺物実測図① (1/4)37
図12 第1遺構面 構築実測図② (1/40)19	図26 SD1002 出土遺物実測図② (1/2)38
図13 第2遺構面 平面図 (1/200)21・22	図27 第1・2遺構面 出土遺物実測図 (1/4・1/2)39
図14 第2遺構面 構築実測図 (1/100・1/40)23・24	図28 第1遺構面 出土遺物実測図 (1/4・1/2)40

挿表目次

表1 第1遺構面 遺構番号対照表.....12	表4 土器観察表(1)～(6).....45～50
表2 第2遺構面 遺構番号対照表.....22	表5 石器観察表.....51
表3 ピット一覧表.....44	

本文写真目次

写真1 流路B検出状況.....6	写真3 流路A付近に粗砂が分布する状況.....6
写真2 流路Cの断面と基本層序II層の被覆状況.....6	写真4 基本層序II層に粗砂が含まれる状況.....6

第1章 調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯

高松市川島本町字留田 56 番ほかで葬祭会館の建設が計画された。事業地の東側隣接地には川島本町遺跡（県道調査）が位置しており、周知の埋蔵文化財包蔵地の隣接地であることから、平成 28 年 2 月 4 日付けで事業者である株式会社ベルモニーから本市教育委員会（以下、市教委）に対して、埋蔵文化財の試掘調査依頼が提出された。

同年 2 月 15 日～17 日までの実働 3 日間を要して実施した試掘調査の結果、事業地内の全域で遺構や遺物が確認されたことから、調査後に事業地全域が周知の埋蔵文化財包蔵地「川島本町遺跡」の範囲に追加・登録された。

試掘調査の結果を受けて、事業者と市教委で工事の設計変更等の協議を行ったが、遺跡に影響のある工事掘削は避けられず、同年 5 月 26 日付けで事業者から工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出が市教委に提出された。その届出を市教委から香川県教育委員会（以下、県教委）に進達したところ、同年 5 月 27 日付けで県教委より工事着工前に建物本体等の規模の大きい箇所を発掘調査、掩壁などの狭小な掘削箇所を立会調査で対応し、保護措置を図るようとの行政指導があった。

発掘調査の実施に向けて事業者と市教委はその後も協議を重ね、費用面などの合意が形成されたため、

同年 6 月 30 日付けで発掘調査の費用負担窓口となる株式会社ベルモニーと業務を管理する高松市、調査・整理作業を管理する市教委の 3 者で協定を締結し、「川島本町葬祭会館建設工事に伴う埋蔵文化財調査管理業務」として、埋蔵文化財の発掘調査を実施することになった。なお、協定の締結に先立ち、費用負担者の意向で発掘調査全般を業者委託することとなり、同年 6 月 24 日付けで費用負担者が選定した委託業者である株式会社中塚工業と契約が交わされた。

第2節 発掘調査の経過（調査日誌抄）

発掘調査の対象は、建物本体（A・B 地区）、エントランス支柱（C 地区）、浄化槽（D 地区）、防火水槽（E 地区）の大別 4 箇所である。これらの調査対象は事業地内の複数の地点に分散する。発掘調査は、事業地内に排水置き場を設けることと作業効率を考慮して、建物本体は南北で 2 回に分けて調査した。その他の地区は、建物本体の調査と併行し、適宜、実施した。

発掘調査は平成 28 年 7 月 4 日に建物本体南半（A 地区）から着手し、同年 8 月 22 日に最後の調査区の記録作成が完了、同年 8 月 24 日にすべての調査区の埋戻しが完了し、現地調査を終了した。

主な調査経過は、下記の調査日誌抄のとおりである。

調査日誌抄（平成 28 年 7 月 4 日～同年 8 月 24 日 実働 37 日）

7 月 4 日（月） 調査区設定：建物本体南半（A 地区）の重機掘削を開始した。調査区西側の一部で遺構検出を行った。

7 月 5 日（火） 遺構掘削を開始した。

7 月 7 日（木） SD1001 の西側に位置する複数の土坑の調査を開始した。多量の遺物が出土し、写真撮影・図化作業を行った。

7 月 16 日（土） 建物本体南半（A 地区）の第 1 遺構面の遺構掘削が完了した。全景写真的撮影と平面図の作成を行った。

7 月 19 日（火） 建物本体南半（A 地区）の第 2 遺構面の重機掘削を行った。合わせて、浄化槽設置箇所（D 地区）の重機掘削も行った。A 地区では、掘削を予定した土層に遺物を含んでいたが、少量であることから重機により掘削を行い、丁寧に遺物の回収に努めた。

7 月 20 日（水） 建物本体南半（A 地区）の第 2 遺構面で遺構を検出し、一部の遺構を掘削した。

7 月 22 日（金） 建物本体南半（A 地区）の第 2 遺構面の遺構を完掘し、全景写真的撮影と図化作業を行った。

7 月 25 日（月） 建物本体北半（B 地区）とエントランス支柱部分（C 地区）の第 1 遺構面までの重機掘削と遺構検出を行った。

7 月 28 日（木） 建物本体北半（B 地区）の第 1 遺構面の遺構掘削を行った。

8 月 5 日（金） 建物本体北半（B 地区）の全景写真を撮影した。

8 月 8 日（月） 建物本体北半（B 地区）の第 2 遺構面までの重機掘削と遺構検出・掘削を行った。

8 月 10 日（水） エントランス支柱部分（C 地区）の第 1 遺構面の全景写真を撮影した。

8 月 16 日（火） 防火水槽設置箇所（E 地区）の第 1 遺構面までの重機掘削と遺構検出・掘削を行った。

8 月 18 日（木） 建物本体北半（B 地区）において第 2 遺構面の完掘状況の全景写真を撮影した。その後、図化作業を行つた。

8 月 22 日（月） 防火水槽設置箇所（E 地区）の第 2 遺構面の重機掘削と遺構検出・図化作業を行つた。また、調査が完了したその他の地区的埋戻し作業を開始した。

8 月 24 日（水） すべての調査区の埋戻し作業が完了した。本日で、現地での作業は終了した。

第3節 整理等作業の経過

調査終了後、平成28年9月から整理作業を開始した。作業の主な内容は、現場で作成した図面・写真の基礎整理、出土遺物の洗浄・接合・実測作業、そして遺構図・遺物実測図のトレースや挿図の作成などである。概ね平成29年5月にこれらの作業が完了し、それ以降は原稿の執筆や編集作業を中心と進めた。なお、整理期間中の平成29年6月に、出土遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託して実施した。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境（図1・2）

高松市は香川県のほぼ中央に位置する県都で、平成17年9月及び平成18年1月に近隣の庵治町、牟礼町、塩江町、香川町、香南町、国分寺町の6町と合併した。その結果、市域の面積も合併前の約1.9倍にあたる約375km²に拡大し、人口も約42万人となり、これまで以上に四国において中核的な都市として重要な役割を担っている。

現在の高松市における主要な居住域となっている

のが高松平野と呼ばれる平野部で、本平野は地形分類では讃岐山脈を源とする複数の河川によって形成された沖積地と位置づけられている。高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川という主に6つの河川が北流して瀬戸内海へと流れ込んでいる。これらの河川のなかでも、香東川は現在の春日川よりも西側の沖積平野を形成したと考えられており、高松平野の地形形成過程を考える上で欠くことのできない河川のひとつと言える。

さて、本事業地は、市域の東側にあたる川島本町に位置する。事業地の東側約500mの位置には、現在の春日川が北流する。事業地の東側隣接地では、平成17年度に県道の建設事業に先立ち香川県埋蔵文化財センター（以下、県埋蔵文化財センター）によって発掘調査が行われた。これが川島本町遺跡で初めて行われた発掘調査であり、その結果、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が確認され、複数の時期にわたる集落跡であることが判明した。

次に事業地周辺の微地形に注目すると、県埋蔵文化財センターの調査報告書に詳細に述べられている①)。これに従えば、事業地は東側の旧河道A、西側



図1 調査位置図

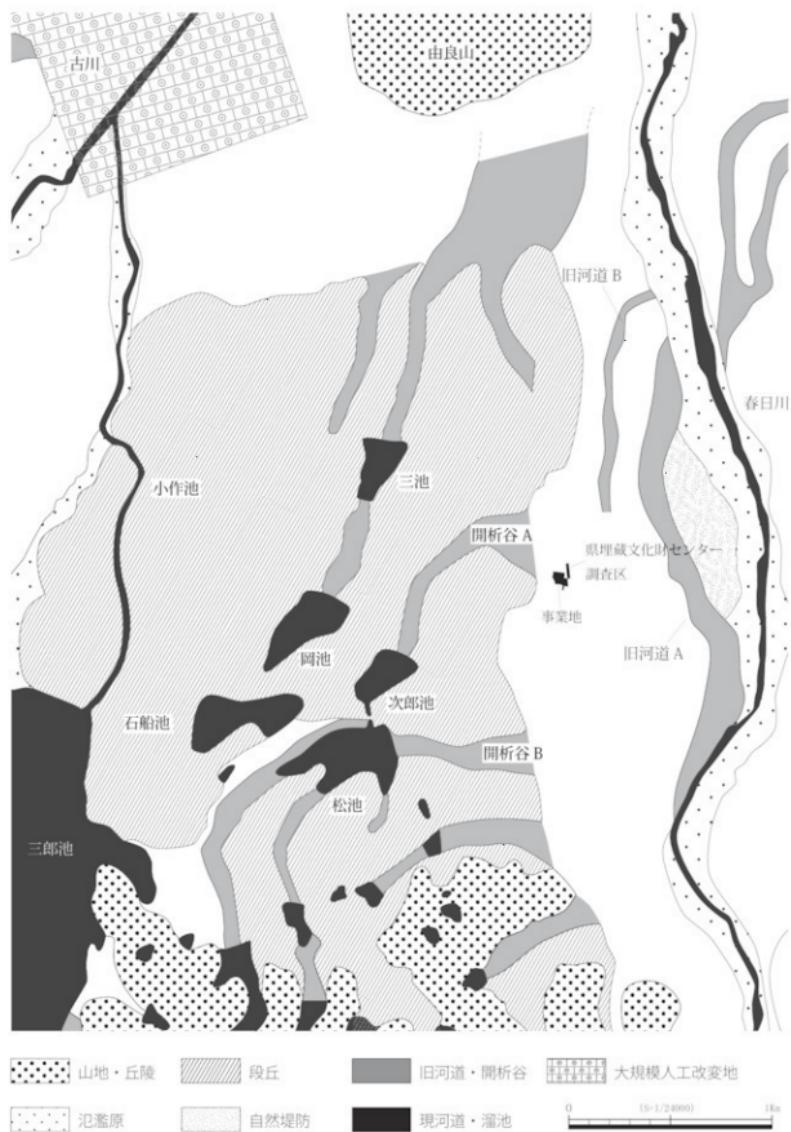


図2 微地形分類と調査地の位置 (1/24,000)

の段丘面に挟まれた扇状地上に立地する（図2）。さらに図2から読み取れるように、事業地は西側にある開析谷Aの東側延長線上に位置する。以上の点を踏まえると、事業地は西側の開析谷と東側の旧河道、双方の堆積作用の影響を受け得る場所であることが推測できる。

第2節 歴史的環境（図3）

事業地周辺で最も古い時期の遺跡が、縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した十川東・平田遺跡である。このほか、遺物包含層から後期の土器が出土した川島本町遺跡2)（2）や、後期の土坑が検出された川島本町山田遺跡3)（4）が知られるが、総じて縄文時代の遺跡の数は少ない。

周辺で人々の活動が活発になるのが弥生時代である。弥生時代前期末の土器が大量に出土した光寺寺山遺跡（17）や、川島本町遺跡から直線距離にして約2.0km南側には、中期末から後期初頭にかけての建物跡などが検出された中山田遺跡などが存在する。また、川島本町山田遺跡4)（4）では前期の土坑が確認されているほか、川島本町遺跡5)（2）で前期から中期の可能性がある溝や、後期の遺物が出土した溝などが検出されている。また、北山下遺跡6)（18）では、後期を中心とした複数の溝が検出されている。これまでの調査で春日川周辺の扇状地上で弥生時代の人々の活動の痕跡は窺えるものの、明確に集落の中心的な居住域となった遺跡は確認されていない。

古墳時代の遺跡では、後円部上に刎抜式石棺が露出する全長約88mの三谷石舟池古墳（13）や、今は全容が明らかにできないが、周濠を含めた直径が約60mと見られる円墳の高野丸山古墳7)（7）などがある。また、集落に関わる遺跡としては、川島本町遺跡8)（2）で前期後葉の土器が出土した土坑や井戸などが複数確認されている。

古代では、川島本町遺跡から直線距離にして約450m北側に、古代の旧南海道跡（5）の推定ラインが位置する。また、旧南海道跡に隣接する高野庵寺（6）では、奈良時代から平安時代の軒瓦が出土しているほか、西下遺跡9)（24）で古代の建物などが検出されている。

中世では、平安時代末に土着した植田氏が十河・神内・三谷・由良氏などに分かれ、十河氏を頭領として多数の城館が形成された。これ以外に、前述

の北山下遺跡10)（18）で13世紀後半から14世紀前半頃の3棟の掘立柱建物跡が確認されており、当地において数少ない中世の集落の状況の一端が明らかとなっている。

第3節 川島本町遺跡の既往の調査成果（図4）

平成17年度に本事業地の東側に隣接する川島本町遺跡で県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われたが、本遺跡にとって重要な知見が複数ある11)。この発掘調査の要点を整理すると、①自然流路や河川堆積に起源すると見られる黒褐色系シルト層などを基盤として遺構が掘り込まれる、②主に縄文時代後期、弥生時代前期～中期、弥生時代後期～古墳時代前期、中世の遺構・遺物が検出された（調査区の北側で弥生時代後期～古墳時代前期の遺構、調査区中ほどで縄文時代後期の遺物群、調査区南側で弥生時代前期～中期の遺構など、各時期の遺構がエリアを隔てて検出された）、③検出した遺構は土坑・井戸・ピット・溝が中心で、竪穴建物跡など居住を直接示す遺構は確認されていない、④特に事業地北側の土坑等の遺構を検出した箇所は、地下水位が高い、以上4点である。このうち、本事業地の層序に関わる所見として、①は重要と言える。報告書の平面図・断面図や事実報告では詳細に触れられていないが、全景写真や一部の断面写真で遺構面を切り込んで粗砂層が帯状に2条認められた。さらに、調査区東側の断面図や断面写真では、後述する本事業地と類似する土層である黒褐色系シルトの土層が観察されている。前者について、北側の1条は調査区北側で南北から北東方向に認められ、南側の1条は調査区南側で東西方向に観察できる。断面写真などから、双方は遺構面を切り込む自然流路と考えられるが、南側の自然流路は、位置関係から本事業地の北側で観察できた自然流路（流路C）の東側延長部分と考えられる。一方、後者の黒褐色系シルトは、平面図には記されていないが、各断面図から推定すると、調査区東端を南北から北方向に分布する土層と考えられる。層相などから、河川堆積を起源とする土層と考えられるが、本事業地でも類似した土層（基本層序II層）が認められた。双方が同じ土層であるかは不明だが、いずれにしても事業地周辺の堆積環境を検討する場合の重要な土層と推定できる。また、④の地下水位が高い点を考慮すると、少なくとも事業地周辺は自然流路が複数流下するよう



- ①. 川島本町遺跡（市教委調査地） 2. 川島本町遺跡（県埋蔵文化財センター調査地） 3. 川島本町南遺跡 4. 川島本町山田遺跡 5. 旧南海道跡 6. 高野魔寺 7. 高野丸山古墳 8. 高野南1・2号墳 9. 錬野西遺跡 10. 三谷中原遺跡 11. 錬野城跡 12. 石舟池1～10号墳 13. 三谷石舟池古墳 14. 三谷城跡 15. 下代古墳 16. 光専寺山西・中央古墳 17. 光専寺山遺跡・光専寺跡 18. 北山下遺跡 19. 出羽城跡（出羽告跡） 20. 川東1・2号墳 21. 松字八幡馬場古墳 22. 古塚古墳 23. 西尾天神社古墳 24. 西下遺跡 25. 露尾遺跡 26. 十川城跡 27. 三谷三郎池窪跡 28. 矢野面古墳 29. 宮ノ浦遺跡 30. 蟹山（小白山）2号墳 31. 蟹山（小白山）1号墳 32. 平石上古墳群 33. 日山山頂経塚・古墳 34. 横内東遺跡 35. 加摩羅神社古墳 36. 北野遺跡 37. 由良山城跡 38. 由良南原遺跡 39. 大瀬遺跡

図3 周辺の遺跡

な環境で、なおかつ河川の堆積作用の影響を受けやすい地点であったことが推定できる。

註・引用文献

- 1) 香川県埋蔵文化財センター（編）2007『県道高松普通寺線道路改修事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』田舎道跡2 川島本町道路 川島本町南遺跡：香川県教育委員会
- 2) 註1) 前掲
- 3) 香川県埋蔵文化財センター（編）2007『県道大庭仁尾線道路改良事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』家の浦道跡川島本町山田道路：香川県教育委員会
- 4) 註3) 前掲
- 5) 註1) 前掲
- 6) 高松市教育委員会（編）2015『高松市立山田中学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』北山下遺跡：高松市教育委員会
- 7) 川島郷土誌編集委員会（編）1995『川島郷土誌』川島村く地域おこし事業推進委員会
- 8) 註1) 前掲
- 9) 高松市教育委員会（編）2008『西下道路・高松市立十河小学校校舎建て替え事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』高松市教育委員会
- 10) 註6) 前掲
- 11) 註1) 前掲

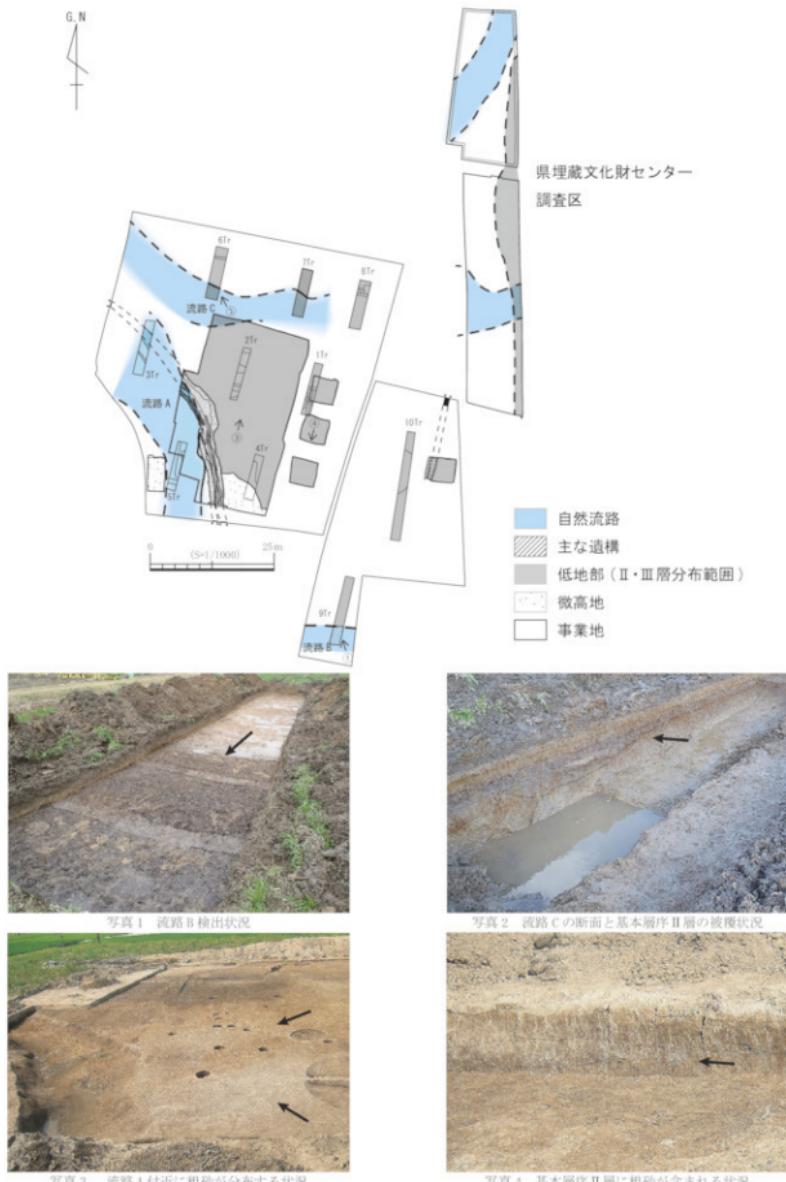


図4 層序に関わる事業地周辺の調査成果 (1/1,000)

第3章 調査成果

第1節 試掘調査の成果（図5）

試掘調査の実施前から、事業地では多くの遺物が表探できる状態であり、当地は多くの遺物を包蔵している可能性が考えられた。試掘調査は、事業地内に南北方向のトレンチを合計10本設定して行った。試掘調査の概要については平成28年度に刊行した高松市教育委員会（編）『高松市内遺跡発掘調査概報－平成28年度国庫補助事業－』に掲載したが、調査成果の要点は、①事業地内の全域でピット・土坑・溝などの遺構や、縄文時代から中世にかけての遺物が出土した、②地点によって遺構の基盤となる土層が異なる、③事業地内には自然流路が存在し、かつ湧水が多いことから地下水位が高いことが推定できる、以上の3点である。このうち、②・③の所見と調査地周辺の微地形から、事業地は河川の堆積作用の影響を受けやすい環境であることが考えられた。

試掘調査の結果、事業地全域で遺構・遺物が認められたことから、隣接する川島本町遺跡の範囲に追加・登録された。

第2節 発掘調査の成果

(1) 発掘調査の方法（図5）

a 調査区の設定と掘削方法

調査区は、工事によって遺跡が破壊されるか、保護層30cmの確保が困難な箇所のみに設定した。事業地内の複数の地点に発掘調査区が生じることとなつたため、調査中の遺跡の養生や重機の進入路、作業効率などを考慮して、複数の調査箇所を併行して調査することとした。

掘削方法は、遺構面までの掘削を重機で行い、その後、人力で遺構検出・掘削を行った。ただし、遺物包含層は、遺物の多寡を慎重に観察しながら、重機によって掘削した。また、調査区内で確認した自然流路は、遺構面での検出時や部分的に掘削したところ遺物が含まれていなかつたため、平面での検出のみ実施した。

b 図化作業・遺構番号・遺物の取り上げ（表1・2）

遺構等の図化作業は、平面図は調査区内に任意でグリッドを設定し、手測りで測量した。その後、現地でグリッドの交点の国土座標（世界測地系）を測量し、整理作業中に各図面に国土座標の数値を与えた。断面図も手測りで作図した。

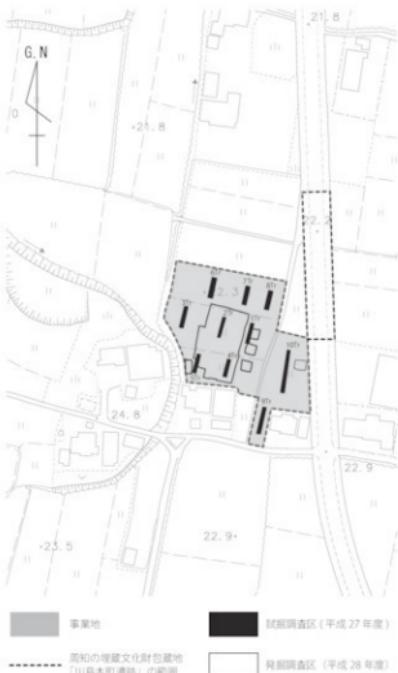


図5 調査区位置図

遺構番号は、調査区ごとに、かつ遺構の種類ごとに略号（SK・SE・SP・SX・SD）と1から順に番号を与えて管理した（SD1など）。ただし、整理作業の過程で、煩雑さを避けるために、遺構面ごとに遺構番号を再整理した（表1・2参照）。

遺物は、遺物包含層単位と遺構単位で取り上げた。特に集中して遺物が出土した土坑や溝については、現地で大別層を検討して、その大別層単位で取り上げた。

(2) 地形・自然流路と基本層序

a 地形（図2）

事業地の西側には微地形分類では開析谷（開析谷A）が認められ、なおかつ東側には旧河道（旧河道A）が存在する。このため、事業地は双方の影響を受け得る環境にあることが調査前から想定できた。なおかつ、試掘調査の状況により、遺構の基盤となる土層は地点によって異なることも、前

述の想定を首肯させるものであった。

さて、調査区内の地形は、遺構等の完掘後の状況から、建物本体部分南側の微高地と、そこから北に向けて低くなる低地部との二大別が可能である。建物本体部分南側の微高地は、前述した微地形分類に従うと、西側にある段丘面の縁辺部の一部にあたると考えられる。それに対して、北側の低地部は、微地形分類の開析谷Aと関連する低地部と考えられる。なお、低地部は調査区内では北側の立ち上がりは確認できず、調査区内では同様の地形面が北へと連続する状況を確認した。後述する基本層序も、概ねこの地形分類に沿って分布範囲が明瞭に分かれる傾向が認められた。

b 自然流路（図4）

今回の発掘調査では、完掘していないものの、調査区内では多く見積もって3条の自然流路（流路A～C）を確認した。流路Aは事業地北西側から南西側にかけて認められ、調査区内で南に向けて屈曲する特徴がある。幅は6m程度、埋土の表層部には灰色粗砂が堆積する。深さは不明だが、周辺の地形を考慮すると概ね東流する自然流路と考えられる。流路Aは、低地部に堆積する土層（基本層序II・III層）、調査区南側では段丘面の基盤（基本層序IV層）を切り込んで形成されていることを確認した。なお、基本層序との前後関係を整理すると、流路Aより先に基本層序II・III層が堆積し、その後、流路Aが埋没する。

流路Bは、試掘調査9トレンチで北肩のみを検出した（写真1）。幅は不明で、埋土が類似することと位置関係から、流路Aと同一の自然流路である可能性も考えられる。流路Bの基盤となるのは褐色細砂である。

流路Cは、試掘調査6・7トレンチで北肩を検出し、南肩の可能性がある平面形を建物本体部分北西側で検出した。流路Cは概ね東西方向に流れる流路と考えられ、南肩の認識が正しければ幅は5m程度である。位置関係や自然流路の幅から、県埋蔵文化財センター調査区で検出された南側の自然流路が同一のものと推定できる。流路Cは試掘調査6トレンチでの観察所見から、流路Cの埋没後に基本層序II層が堆積することを確認した（写真2）。

以上のとおり、事業地内には最大3条の自然流路が存在することが推定でき、後述する基本層序との前後関係から、形成・埋没時期が異なる自然

流路の存在が明らかとなった。

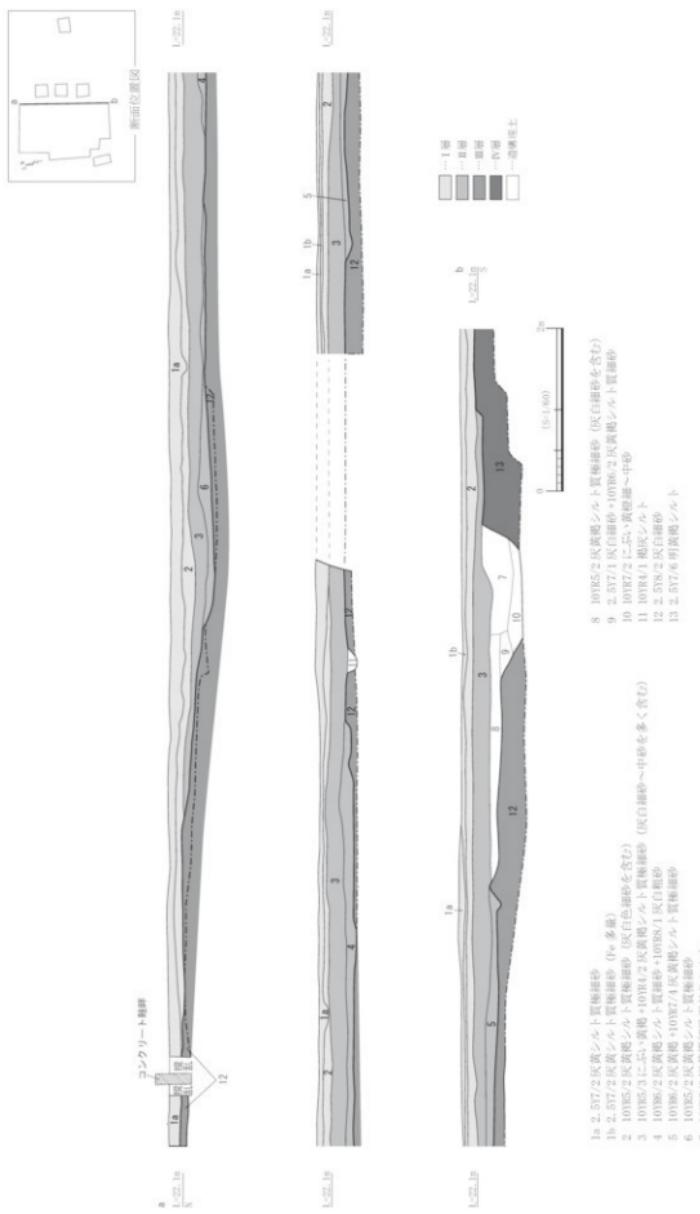
c 基本層序（図6）

これまで整理した事業地の地形と自然流路の状況を踏まながら、事業地内の表層部の基本層序を整理する。

当地の基本層序は大別して4層にまとめることができる（上から順にI～IV層）。I層は、調査直前まで当地で行われていた耕作に伴う土層で、層厚約0.2mである。II層は、調査区南側の一部には分布せず、低地部のみに堆積する黒色系統の土層である。層厚は最も厚い箇所で約0.2m、本土層は遺物を包含する。流路Aが南へ屈曲する地点の東側では、平面ではスプレーを噴射したように粗砂が分布する範囲を複数確認した（写真3）。断面では、この粗砂がII層中に高低差を持ってまばらに堆積し（写真4）、粗砂の一部が表層部に露出する箇所も観察できた。III層は、II層と類似した平面分布で、II層の下位に堆積する砂系を主体とする土層である。層厚は不明であるが、表層部で遺物は認められない。IV層は、明黄褐色シルトのしまりのある土層で、調査区南側のみ確認した。遺物は含まず、いわゆる地山と考えられる土層である。IV層は、II・III層の基盤となる土層であり、かつ事業地西側の段丘面表層部の基盤を形成する土層と考えられる。

基本層序のうち留意が必要なのは、流路A東側のII層中にスプレーを噴射したような平面形で観察できた粗砂である。分布がこの地点に限定され、なつかつ流路Aの屈曲点付近に位置すること、スプレーを噴射したように粗砂が分布することから、流路Aに起源するクレバースプレー堆積物（破堤堆積物）Iの可能性があると考えられる。この見方が正しければ、粗砂が認められた範囲には流路Aが増水した際にオーバーフローした堆積物が累重する（上方付加）環境であったことになる。さらに、粗砂がII層中に認められることから、II層の起源を流路Aに求めることができるかもしれない。これについては、流路Aの下部の埋積状況を確認していないため断定できないが、可能性のひとつと考えておきたい。

一方、基本層序III層は、自然流路A・Cとの層位的な前後関係から、形成時期に前後差があり、かつ堆積物の供給源が異なることが推定できる。II層は前述した流路Aとの関係で捉えていくべきと考える一方で、III層は西側からの開析谷Aとの関係



調査区東壁断面図 (1/60)

で捉えるべきと考えられる。具体的にⅢ層は、流路Aの形成以前に谷部を充填した広義の谷埋め堆積物にあたる土層として、Ⅱ層とは形成時期に差のある土層と考えられる。

自然流路の方向や基本層序の形成要因の検討から、事業地は西側の開析谷Aからの土砂供給の影響を多分に受ける場所であったことが推定できる。

層序の関係を踏まえた遺構の認識は、調査区南側のみ認められたⅣ層上面と、それと連続して平坦な地形面を形成するⅡ層上面で検出できる遺構を第1遺構面検出遺構として調査した。その後、低地部に堆積するⅡ層を除去した直下のⅢ層上面で検出できる遺構を第2遺構面検出遺構として調査した。

(3) 検出遺構・出土遺物

a 第1遺構面の遺構

第1遺構面の概要（図7、写真図版1）

第1遺構面の上面の標高は、調査区東壁断面（図6）を参考にすると南・北端ともに標高約22.1m程度で、大きな高低差は認められない。これは、元々平坦な地形だった可能性もあるが、第1遺構面の直上に現代の耕作関連の土層が堆積することを考慮すれば、遺構面の上面が改変されていることも想定しておく必要があるだろう。この地形面上に、土坑・井戸・ピット・性格不明遺構・溝と自然流路が形成される。これらの遺構を破壊して、近世以降に形成された溝などが調査区南西側と中央付近に認められる。なお、本報告では、近世以降の遺構は平面的な記録のみ報告する。

第1遺構面の遺構は、出土遺物から主に古墳時代の遺構が分布すると考えられる。遺構分布の特徴は、調査区南西側に規模の大きいSD1001・1002が、地形の変換点でかつ流路Aと一部が重なるように開削される点である。その西側の微高地には、内部から多くの土器が出土した土坑が複数存在する。一方、SD1001の東側では、多数のピットや溝、性格不明遺構などが分布するが、SD1001の西側とは分布する遺構の種類がやや異なる。なお、ピットの配置から掘立柱建物跡の復元はできなかった。

事業地東端では、南北方向に開削された溝が1条存在する。出土遺物から前述した遺構とは形成時期が異なると考えられる。位置関係から、県埋蔵文化財センターの調査区で検出した溝と同一の溝の可能性が考えられ、条里に関わる遺構の可能

性が想定される。

土坑

SK1001（図8、写真図版2）

SD1002から西へ約2.0mの場所に位置し、流路A上に掘削された土坑である。掘り形はやや南北に長い楕円形で、長軸約1.9m、短軸約1.7m、検出面からの深さは約0.4mである。埋土は6層に分かれ、上位に粘性のある土層、下位に粘性の低い土層が堆積する。SK1001の掘削中、底部付近では湧水が認められた。

遺物は、完形に近い土器が土坑の中心付近で集中して出土した。出土したのは、断面図1層からである。土器の器種は甕・壺・高杯を中心で、口縁を上や横に向けたものが存在するが、土器の遺存状況と分布を考慮すると、土坑の外側から投棄したものとは考えにくい。

SK1002（図8、写真図版3）

SD1002から西へ約1.5m、SK1001から南東へ約1.0mの場所に位置し、流路A上に掘削された土坑である。掘り形は南北に長い楕円形で、長軸約1.7m、短軸約1.3m、検出面からの深さは約0.6mである。埋土は6層に分かれ、土坑のなかほどから下位にかけては粘性の強い土層と砂が互層状に堆積する。土坑の底部付近では、湧水が認められた。

遺物は、SK1002の検出面付近で、2個体の甕が横位の状態で互いに口縁部を向けて出土した。いずれの土器もほぼ水平な状態であることと前述の出土状況を考慮し、土器は土坑内に投棄されたものではなく、意図的に配置された可能性が高いと考えられる。遺物の組成の中心は、土師器甕・壺・高杯であり、甕の中には穿孔が認められる個体が複数ある。

SK1003（図8、写真図版4-1）

SD1002から西へ約2.0mの場所に位置し、流路A上に掘削された土坑である。掘り形はやや東西に長い楕円形で、長軸約0.7m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約0.3mである。埋土は3層に分かれ、いずれも砂系の土層である。

SK1004（図8、写真図版4-2）



図7 第1遺構面 平面図(1/200)

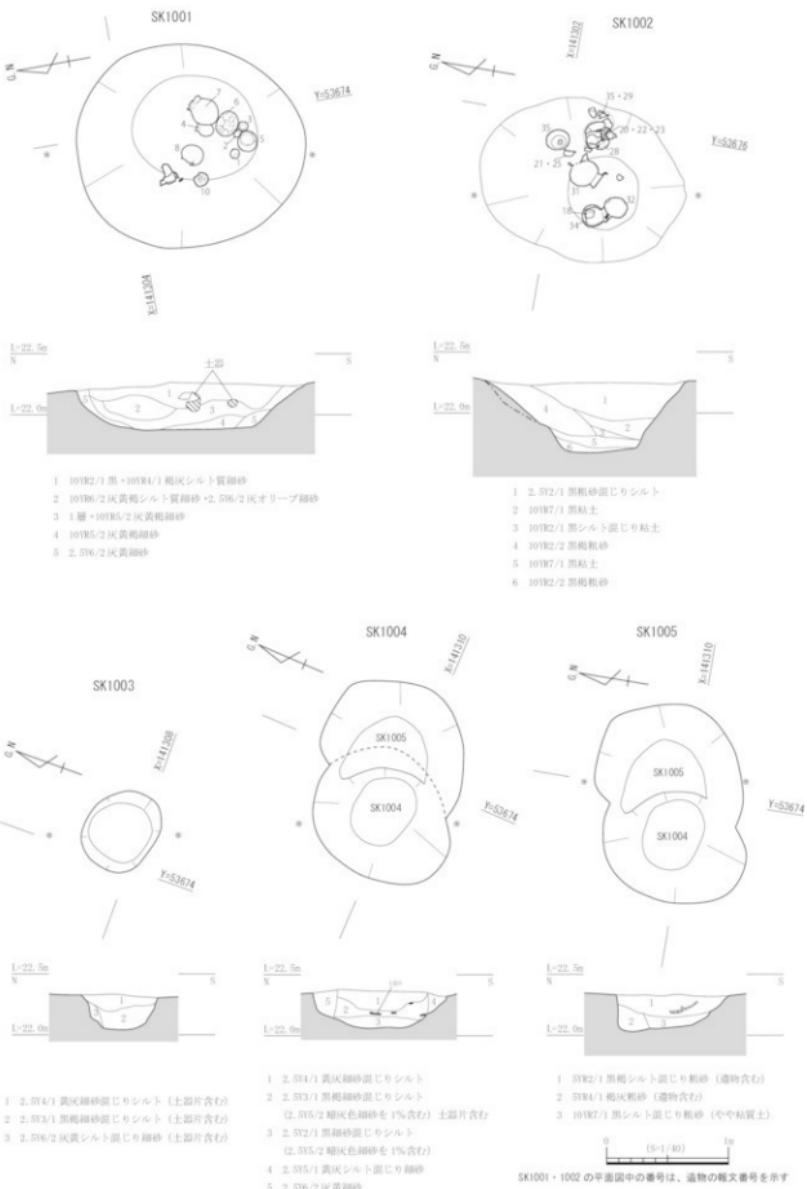


図8 第1遺構面 土坑実測図 (1/40)

SX1002 から西へ約 1.5 m の場所に位置し、流路 A 上に掘削された土坑である。遺構の検出時にまず SK1004 を検出し遺構掘削を進めたが、土坑の東半を掘削中に異なる遺構(のちに SK1005 と命名)が重複して存在することを確認した。このため、断面では双方の前後関係を確認できなかったが、平面で最初に SK1004 の掘り形の全形を検出できたこと、遺構底部の深さが若干異なることから、異なる 2 基の土坑が重複し、なおかつ SK1005 が先に形成・埋没し、その後に SK1004 が掘削されたと判断した。

掘り形はやや南北に長い梢円形で、南北長は約 1.3 m、検出面からの深さは約 0.3 m である。埋土は 5 層に分かれ、大半がやや粘性のある土層である。

SK1005 (図 8)

SK1004 の東半の一部を破壊して形成された土坑で、流路 A 上に位置する。掘り形はやや南北に長い梢円形と考えられ、南北長は約 1.2 m、検出面からの深さは約 0.3 m である。埋土は 3 層に分かれ、大半が砂系の土層である。

井戸

SX1001 (図 9)

調査区北端付近に位置し、流路 C に隣接して掘削された遺構である。他の遺構と比較して、調査時からの遺構内の湧水量が著しく多いことから、遺構の性格を井戸と考えた。なお、隣接して存在する SD1003 とは平面的に重複関係が認められず、埋土も類似することから、一連の遺構と捉えて調査した。

SX1001 の掘り形は梢円形で、長軸約 1.6 m、短軸約 1.4 m、検出面からの深さは約 0.4 m である。埋土は 6 層に細分でき、いずれも砂系の土層である。

ピット (図 7、表 3)

調査区の中央付近を中心に、流路 A、基本層序 II 層等を基盤として掘削された遺構である。大小様々で深さも多様であるが、位置関係から掘立柱建物跡を復元することは困難であった。また、各ピットの時期についてもすべてのピットから遺物が出土していないため明らかにできないが、他の遺構の出土遺物から概ね古墳時代前期に形成されたピットと考えられる。

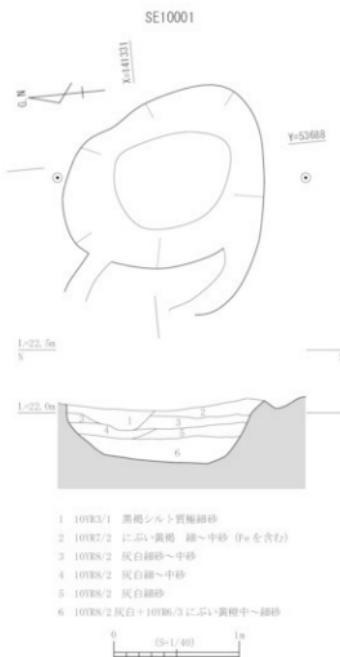


図 9 第 1 遺構面 井戸実測図 (1/40)

性格不明遺構

SX1001 (図 10)

調査区中央付近の II 層上面に掘り込まれた溝状の遺構である。後述する SX1002 と形状が類似しており、一連の遺構である可能性も考えられるが、規模が小さいため、方形周溝墓とは異なる遺構と判断した。なお、SX1001 と SP1027・1028 は重複関係にあり、平面での確認から SX1001 が先行して形成された遺構と考えられる。

SX1001 の検出長は約 3.6 m、幅 0.4 ~ 0.5 m である。遺構の形状等から性格を特定することはできなかった。

SX1002 (図 10)

調査区中央付近の II 層上面に掘り込まれた溝状の遺構である。前述した SX1001 と形状が類似しており、一連の遺構である可能性も考えられる。SX1002 の検出長は約 2.5 m、幅 0.4 ~ 0.5 m、検

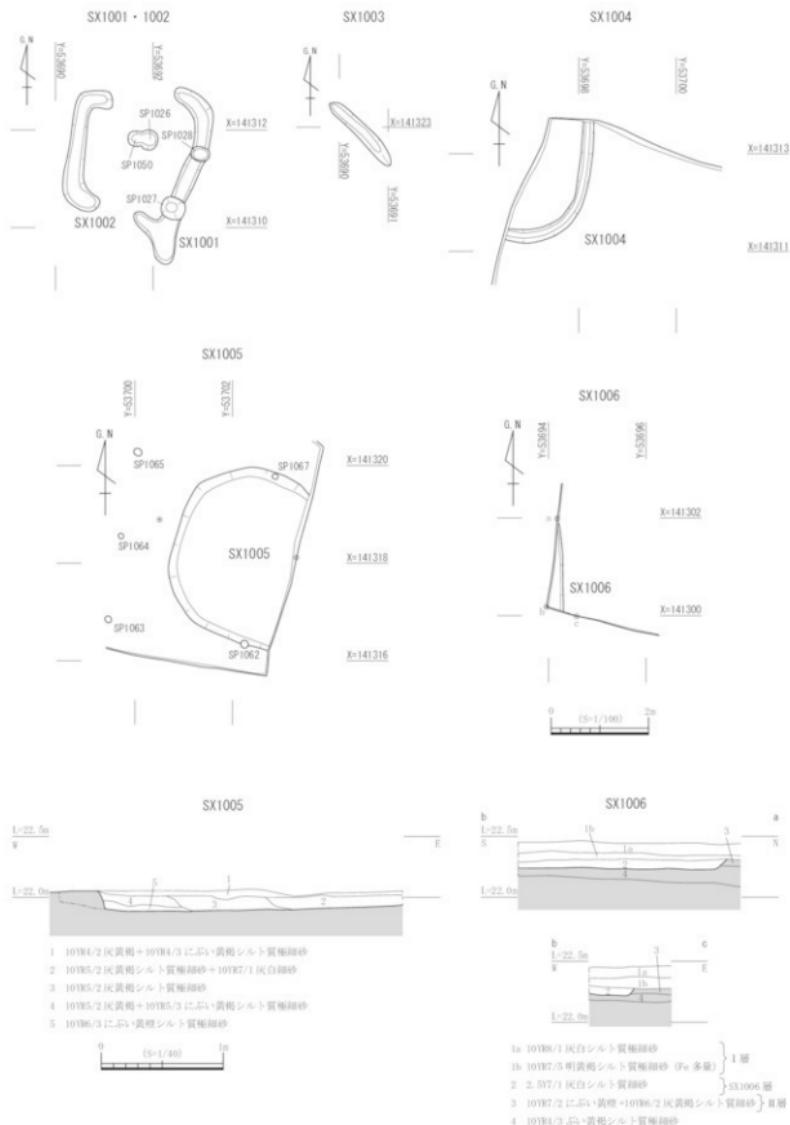


図 10 性格不明遺構実測図 (1/100・1/40)

出面からの深さは約 0.1 m である。遺構の形状等から性格を特定することはできなかった。

SX1003 (図 10)

調査区中央付近の II 層上面に掘り込まれた溝状の遺構である。検出長は約 1.7 m、幅は約 0.3 m、検出面からの深さは約 0.1 m である。溝の可能性もあるが長さが短く、遺構の性格を特定することはできなかった。

SX1004 (図 10、写真図版 5-1)

II 層上面に掘り込まれた遺構である。一部分のみ検出した。確認したのは溝状の平面形で、弧状に配置される。幅は 0.2 ~ 0.3 m、検出面からの深さは約 0.1 m、埋土は褐灰色と灰黄褐色が混じるシルト質極細砂の単層である。遺構の形状は竪穴建物跡の周壁溝に類似するが、遺構のすべてを調査していないこと、溝の内側で、柱穴などの遺構を検出していないことから、竪穴建物跡とは異なる遺構と判断した。遺構の性格は特定できなかった。

SX1005 (図 10、写真図版 5-2)

II 層上面に掘り込まれた遺構である。遺構の一部は調査区の外側となる。SX1005 は SP1062・1067 と重複関係を有し、平面での観察から SX1005 が先行して形成された遺構と考えられる。

掘り形は円形を呈し、南北方向の長さは約 3.5 m、検出面からの深さは約 0.2 m である。平面形が竪穴建物跡に類似するが、遺構底部でピット等の遺構が認められなかったことから、遺構の性格を特定することはできなかった。

SX1006 (図 10)

II 層上面に掘り込まれた遺構である。遺構の大部分は調査区の外側となる。掘り形は溝状を呈し、南北方向の検出長は約 1.9 m、検出面からの深さは約 0.1 m である。一部分を確認したのみであるため、遺構の性格を特定することはできなかった。

溝

SD1001 (図 11、写真図版 6)

調査区北西から南西側で検出した、平面ではやや弧状の配置となる溝である。SD1001 の一部は、流路 A を基盤として掘削される。また、流路 A とは

併通した方向に掘削されるという特徴も指摘できる。SD1001 は、SD1002 と一部が重複しており、断面での観察の結果、SD1001 が先行して形成されたのち、埋没が進行するなかで隣接して SD1002 が開削され、最終的に同じ土層で双方とも埋没する。

SD1001 の幅は 2.5 ~ 4.4 m、検出面からの最大深度は約 1.5 m である。埋土は最終埋没層を含むと上から上・中・下層の 3 層に大別できる。上層は、断面図を作成した場所によっては遺存しておらずすべての断面で確認できなかったが、観察した箇所では細砂ないしは粗砂など砂系の土層で、厚さは最大で 0.2 m 程度である。中層も砂系の堆積物を基本とするが、中層の最下部で黒色系統の粘土層が認められる。下層も砂系の土層で、一部で葉理構造が認められる。これらの大別層の状況から、少なくとも溝が機能している段階では流量の差はあるものの水が流れていたことが想定できる。大別層の層相から、下層は一定の水量が見込める段階、中層は下層と比較して水量が低下した段階に堆積が進行したと推定できる。上層は、SD1002 の最終埋没と同時であることから、SD1001 としては機能を停止しているが、産地状に残った痕跡を最終的に充填する土層と推定できる。なお、SD1001 の底部の標高を確認すると、北と南で高低差がほとんど認められないことから、流方向を特定することはできなかった。ただし、流路 A と同様の根拠から、概ね南に向けて水が流れていると考えられる。

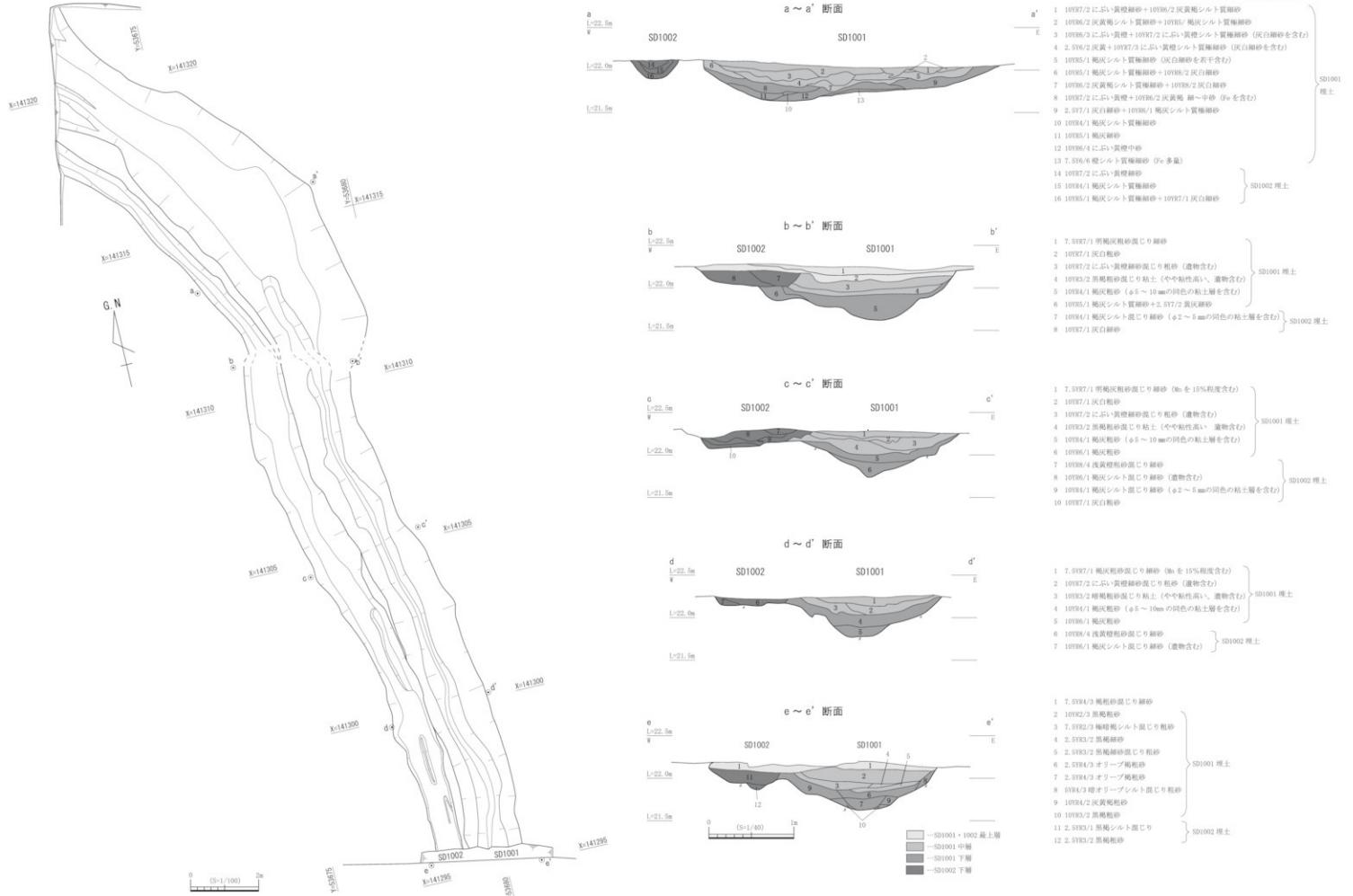
遺物の出土状況は、特に中層からの出土が多かった。特筆すべき遺物として、SD1001 北側の溝北肩付近の中層から、馬の骨の可能性が考えられる骨片 (写真図版 14-4) が複数出土した。

SD1002 (図 11、写真図版 6)

調査区北西から南西側で検出した溝で、SD1001 と一部重複するものの、弧状を描いてほぼ同じ方向に掘削される。SD1002 の一部も、流路 A を基盤として掘り込まれる。SD1002 は、SD1001 の後に形成された溝で、幅は約 0.5 ~ 1.0 m、検出面からの深さは最深部で約 0.3 m、埋土は類似した砂系の土層である。

SD1003 (図 12)

調査区北側で検出した溝である。掘り形の途中



11 第1遺構面 講演測図①(1/100 : 1/40)

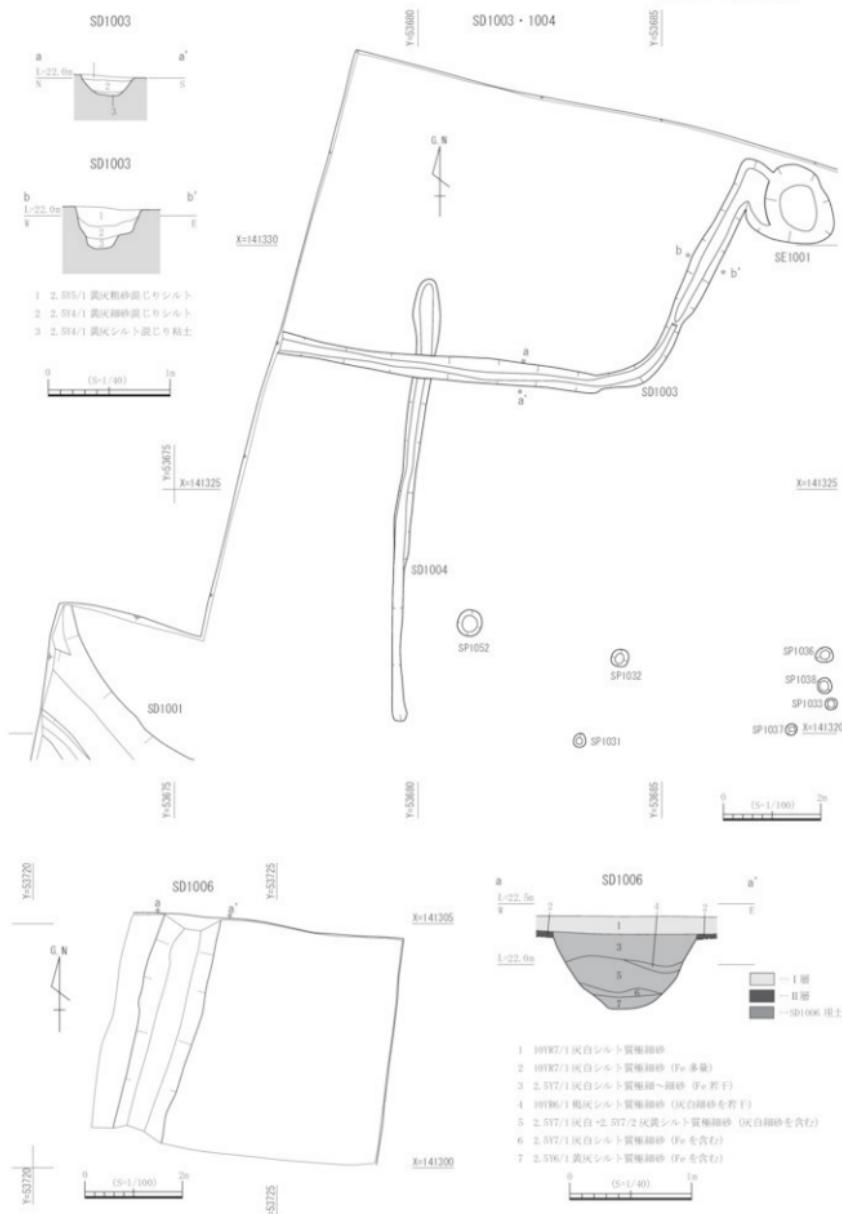


図 12 第1造構面 溝実測図② (1/40)

で北に向けて屈曲し、SE1001 へと続く。検出長は約 12.5 m、検出面からの深さは最深部で約 0.3 m である。埋土は概ね 3 層に細別でき、上位 2 層がシルト、最下層が粘性の高い堆積物である。

溝の底部では、部分的に段差が生じる箇所が認められた。SD1003 と SE1001 の最上層は類似した埋土であるため一連の遺構と捉えた。SE1001 に向けて溝の底の標高が低くなることから、他の地点から SE1001 に水を引いていた可能性が考えられる。

SD1004（図 12）

調査区北西側で検出した南北方向の溝である。SD1004 は SD1003 と重複関係を有し、平面での観察所見から、SD1004 の埋没後に SD1003 が形成されたと考えられる。

SD1004 の長さは約 9.0 m、幅は最大で約 0.5 m である。

SD1006（図 12、図版 7）

事業地の東端で検出した、基本層序Ⅱ層を基盤に掘り込まれた遺構である。SD1006 は、座標に対しても北で東に振る南北方向の溝である。検出長は約 4.7 m、幅は 1.0 ~ 1.3 m、検出面からの深さは約 0.6 m である。埋土は 5 層に細分でき、いずれも類似した極細砂が堆積する。ただし、葉理構造などは明瞭に認められず、流水があったかは不明である。なお、溝の位置と延伸方向から、県埋蔵文化財センターで調査された川島本町遺跡の SD110 と同一の溝と考えられる。

b 第 2 遺構面の遺構

第 2 遺構面の概要（図 13）

第 1 遺構面とは異なり、微高地と低地部の高低差が存在する起伏のある地形と言える。ただし、微高地上に遺構は存在せず、低地部側に土坑や溝、多数のビットと、図 4 に示したとおり調査区北側で流路 C が認められた。ビットの配置から掘立柱建物跡の復元はできなかった。

土坑

SK2001（図 15、図版 8）

調査区北西側に位置し、遺構の西半は調査区の外側となる。遺構の形状から、土坑と判断した。掘り形は円形で、南北方向の長さは約 1.1 m、検出面

からの深さは約 0.3 m、埋土は褐灰色細砂混じり粗砂の単層である。遺構の底部付近で、多くの湧水を確認した。

SK2002（図 15）

調査区北西側に位置し、SK2001 から約 2.5 m 南東側に位置する土坑である。掘り形は南北方向にやや長い楕円形で、長軸約 1.4 m、短軸約 1.1 m である。

ビット（図 13、表 3）

第 1 遺構面と同様に、大小様々で深さも多様なビットが合計 43 基認められた。これらのビットは、概ね 3 箇所程度の塊となって分布する傾向が認められた。ただし、位置関係から掘立柱建物跡を復元することは困難であった。また、各ビットの時期についても、すべてのビットから遺物が出土していないため明らかにできなかった。

溝

SD2001（図 14）

調査区北西側から南東側に向けて検出した溝である。微高地と低地部の境界付近に位置し、調査区中ほどで、掘り形の続きを連続して検出することができなかった。

SD2001 の検出長は約 23.5 m、幅は約 0.5 ~ 1.3 m、検出面からの深さは 0.1 ~ 0.2 m である。埋土は灰黄褐色粗砂混じり細砂の単層である。

SD2002（図 14）

調査区中ほどで検出した溝である。当初は SD2001 の続きを考えて掘削したが、この地点よりも東側で SD2001 の続きをと考えられる掘り形を検出したため、別の溝と認識して調査した。SD2003 と重複関係を有するが、平面での検出状況から、SD2003 が先に形成されたことが明らかになった。検出長は約 2.2 m、幅は約 0.8 m である。

SD2003（図 14）

調査区中ほどで SD2003 と接して検出した溝である。溝の東側を SD2002、西側を SD1001 に破壊される。検出長は約 1.3 m、幅は約 0.5 m、検出面からの深さは約 0.05 m である。埋土は、暗灰黄色粗砂混じりシルトの単層である。

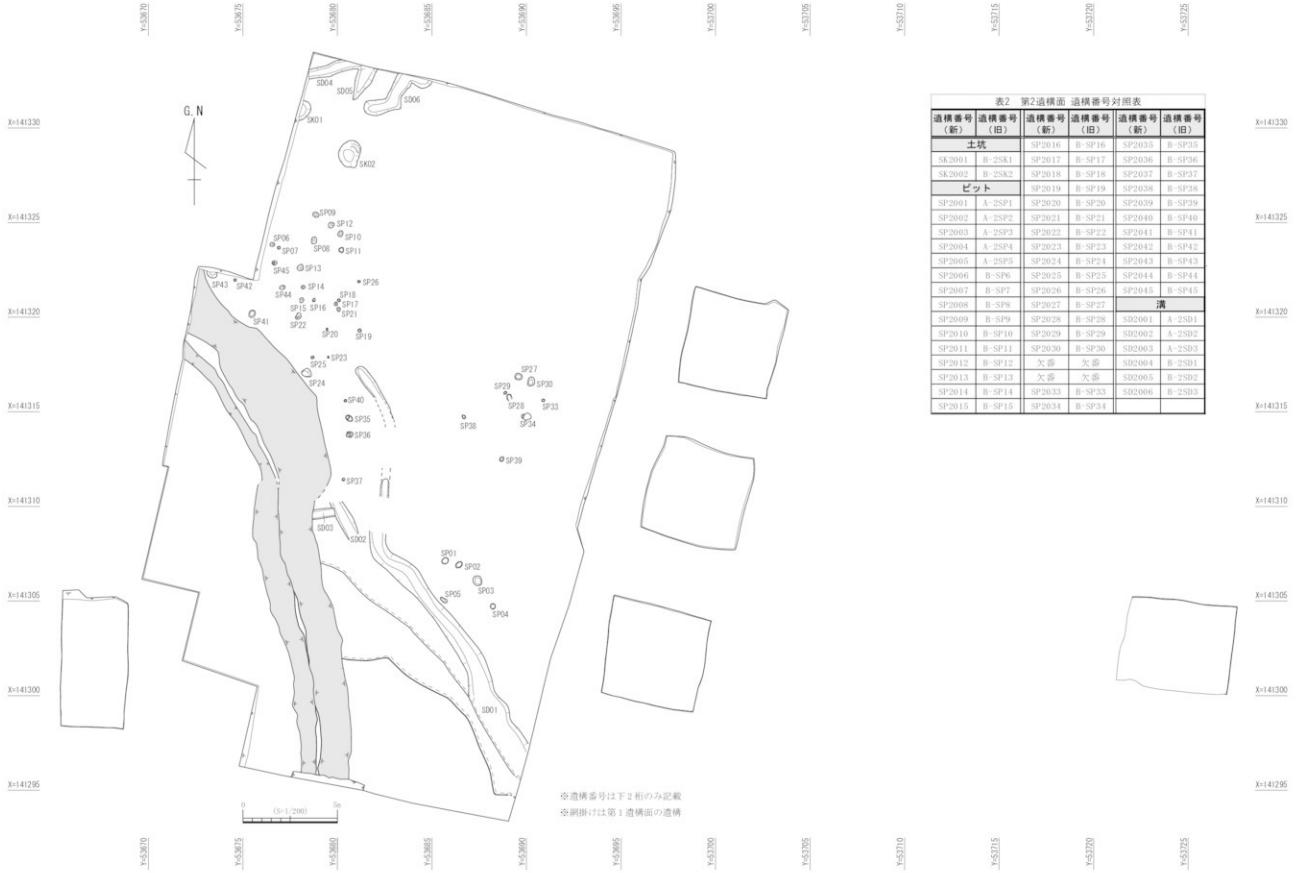




図 14 第2遺構面 溝実測図①(1/100・1/40)

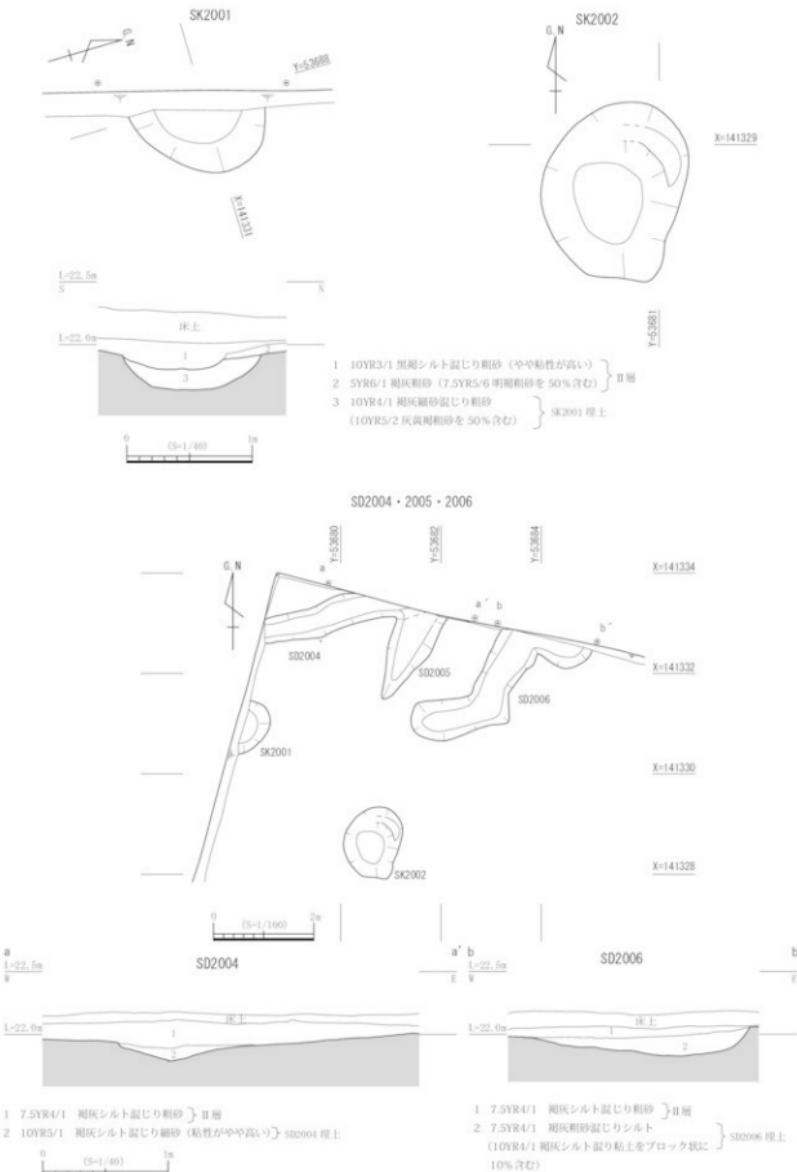


図15 第2遺構面 土坑・溝実測図 (1/100・1/40)

SD2004 (図 15)

調査区北西隅で検出した東西方向の溝である。溝の東側と西側は、それぞれ調査区の外側に続く。SD2004 は SD2005 と重複関係を有し、断面で SD2005 が埋没したのちに SD2004 が形成されることを確認した。検出長は約 3.0 m、幅は 0.5 ~ 0.6 m、検出面からの深さは約 0.1 m である。埋土は褐色シルト混じり細砂の单層である。

SD2005 (図 15)

SD2004 の東側で検出した南北方向の溝である。掘り形は土坑状を呈し、南側の続きを検出することはできなかったが、周辺の遺構の状況などから、溝と判断した。検出長は約 1.9 m、幅は約 0.9 m である。

SD2006 (図 15)

SD2005 の東側で検出したやや屈曲する南北方向の溝である。溝の北側は調査区の外側へと続く。検出長は約 3.0 m、幅は 0.7 ~ 0.8 m、検出面からの深さは約 0.2 m である。埋土は、褐色粗砂混じりシルトの单層である。

c 出土遺物

土坑

SK1001 (図 16、写真図版 9・10・14)

1 ~ 3 は土師器の小型丸底壺である。1 は非常に歪な形態であり、口縁端部を欠損する。体部外面は一部にヘラの擦痕、口縁部内面はヘラの押圧痕が残る。体部外面に黒斑がある。2 は球形の体部に僅かに外反する口縁部が付く。体部外面に黒斑が見られる。3 はやや半球状の体部に外反する口縁部が付く。器形は直である。体部内面にヘラの押圧痕が残る。口縁部・体部の外面には帯状の黒斑が見られる。

4 ~ 7 は土師器の甕である。4・5 は小型の甕である。4 は球形の体部に外反する口縁部が付く。体部下位に焼成後の穿孔が 1 個ある。体部外面下半には煤が付着し、底部付近は熱により赤化する。5 は球形の体部にやや長い口縁部が付く。体部外面下半には煤が付着する。6・7 はやや長胴気味の体部に外反する口縁部が付く。体部外面は剥離が著しく、下半には煤が付着する。

8 は土師器の二重口縁壺であり、球形の体部に短い口縁が付く。外面には黒斑が見られる。

9 ~ 11 は土師器の高杯である。9 は杯部で、内面にヘラミガキが施される。10 は脚部であり、裾部が大きく広がる。最上部は杯部との接合痕である。11 は脚部で、焼成が良好である。最上部は杯部との接合痕で、内面には輪積痕があり、全面に捺り目が残る。

12 は弥生土器の壺であり、ヘラ描き沈線、刺突文、山形文を施す。13・14 は弥生土器の底部である。

15 ~ 17 は石製品である。

15 は石礫未成品で、石材はサヌカイトである。素材削片の 1 側面に細部調整を施す。

16 は二次加工のある削片で、石材はサヌカイトである。1 面からの調整が施される。

17 は磨製石斧で、石材は緑色岩である。

SK1002 (図 17・18、写真図版 9 ~ 11・14)

18 は土師器の小型鉢であり、平底の底部から急角度で体部が立ち上がり、口縁部は直で短い。内外面に黒斑がある。

19 ~ 25 は土師器の小型丸底壺である。19 ~ 21 は球形の体部にやや短い口縁部が付く。22・23 は半球状の体部で、24・25 は球形の体部にやや長い口縁部が付く。20・21・23 は体部内面に明確な輪積痕が残る。

26 は土師器の広口壺である。

27 ~ 34 は土師器の甕である。27・29 は球形の体部に短く外反する口縁部が付く。28・30 は球形の体部であり、28 の内面には輪積痕が残る。31 ~ 34 は球形の体部に外反するやや長い口縁部が付く。31 はやや直立気味の口縁部で、体部には焼成後の穿孔が 2 個見られる。体部内外面には輪積痕が残存し、体部外面上位には黒斑がある。32 の体部内面には輪積痕が残る。33 の外側調整は縱方向に板ナデと横方向のナデが施される。34 は全体的に器厚が薄く、体部中央に焼成後的小さな穿孔が 1 個ある。体部外面下半に黒斑が部分的に見られる。

35 ~ 44 は土師器の高杯である。35 の杯部は丸みを帯びた椀形を呈し、外面中位に僅かな稜を持つ。脚部は中位から大きく広がる。杯部内面に工具痕があり、杯部と脚部の接合部分には接合痕が明瞭に確認できる。

36 ~ 41 は脚部上半で、裾部が大きく広がる器形である。41 の内面には粘土紐巻上げ技法の痕跡が残る。

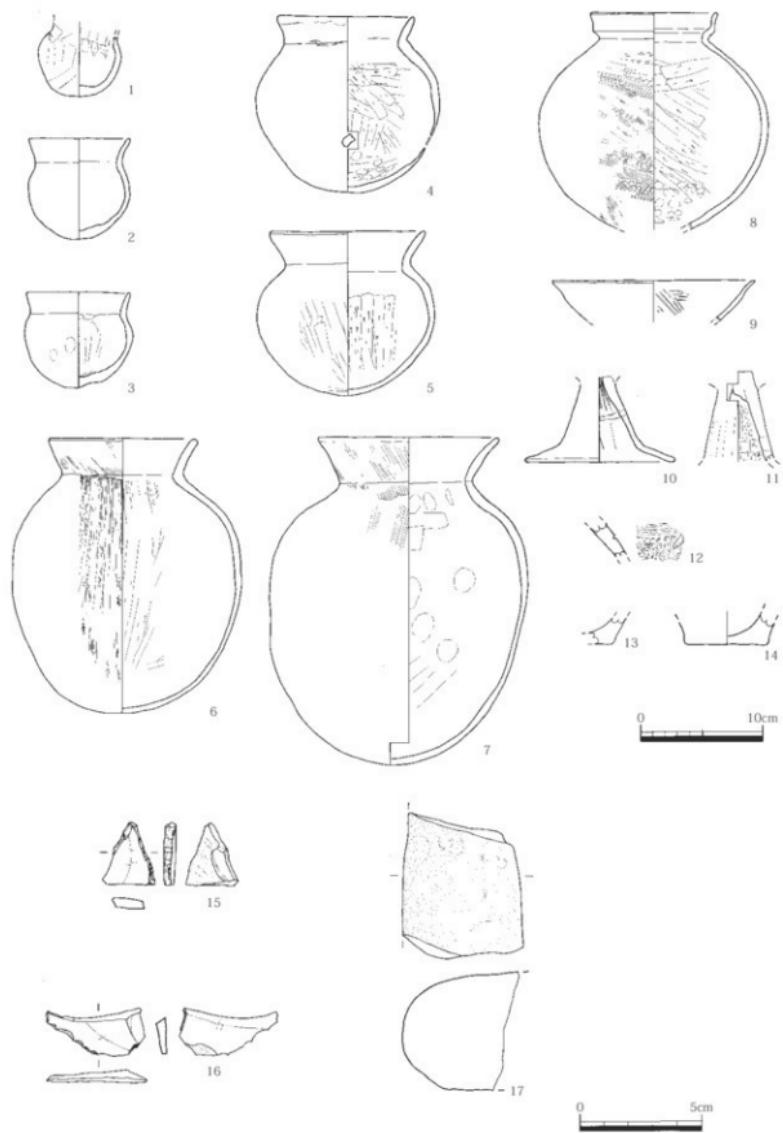


図 16 SK1001 出土遺物実測図 (1/4・1/2)

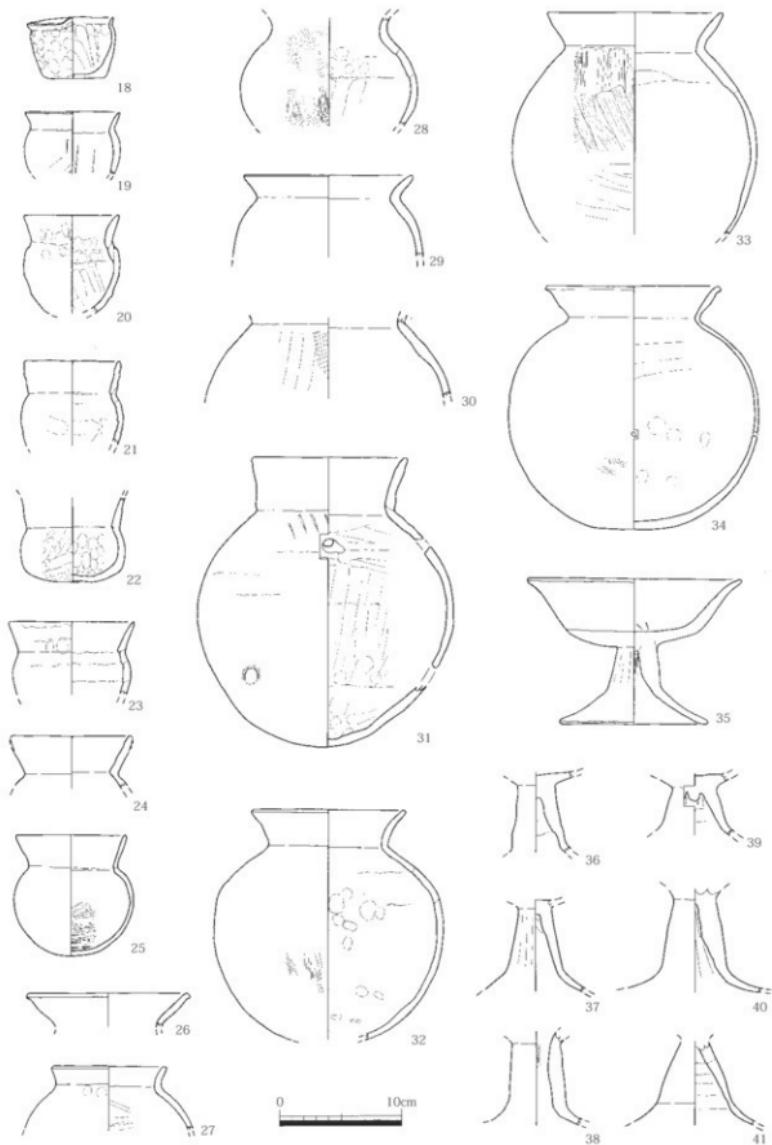


図17 SK1002 出土遺物実測図① (1/4)

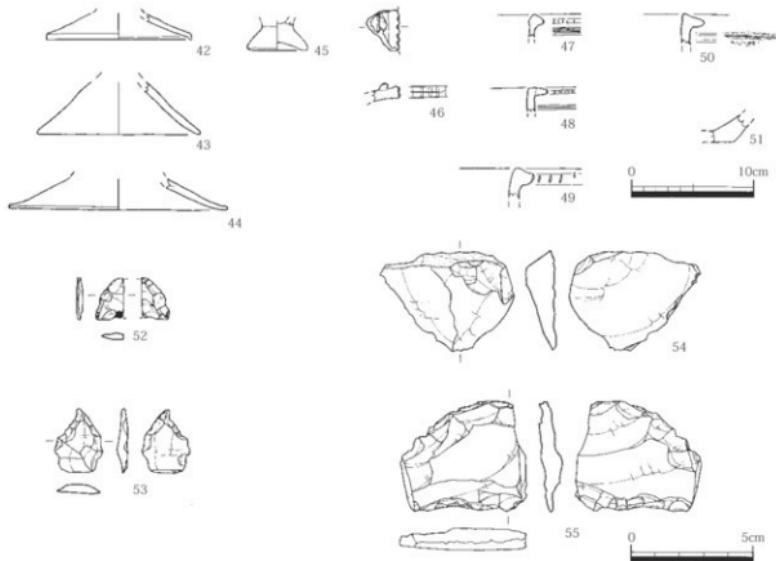


図18 SK1002 出土遺物実測図② (1/4 · 1/2)

42～44は裾部である。42の裾端部は下方に少し拡張し、44の裾端部はほぼ平坦に広がる。

45は土師器の製塩土器の脚部である。

46は弥生土器の壺で、内面に押圧突帯があり、口縁端部には刻み目が施される。47～50は弥生土器の逆「L」字状口縁の甕である。51は弥生土器の底部である。

52～55は石製品で、石材はすべてサヌカイトである。

52・53は平基式石鎚の未成品である。54は微細剥離痕のある剝片で、上側面に自然面を残す。55はスクレーパーで、両面に調整が施される。

土坑

SK1004・1005 (図19、写真図版11)

56は土師器の壺で、全体的に器厚が薄い。

57～59は土師器の甕で、球形の体部から直線的に口縁部が延び、口縁部は比較的強く折り曲げられる。58・59の体部外表面の調整はハケが施される。58は輪積痕が内面に残存する。

60～63は土師器の高杯である。60は椀状の杯部で、脚部との接合痕が明確に残る。61は脚部と

の接合痕が残る。62・63は脚部中位から広がる器形である。

64は土師器の製塩土器である。直線的な体部から口縁部に至る。

65・66は弥生土器の底部である。

67は石鎚で、石材はサヌカイトである。細部調整が1面のみ施される。

溝

SD1001 (図20～24、写真図版12～14)

68～181はSD1001から出土した遺物であり、68～117は上・中層、118～164は下層の遺物、165～182は出土層不明の遺物である。

68・69は須恵器の杯蓋である。68の口縁端部は僅かな凹面を成す。稜は非常に僅かである。69は平坦な天井部で、外面に回転ヘラケズリが施される。

70～74は須恵器の杯身である。70は口径11.8cm、立ち上がり高1.6cmである。立ち上がりは内傾し、端部は段を成す。受部は水平に延びる。71は口径11.8cm、立ち上がり高2.0cmである。受部は外上方に延びる。72～74は口径13.2～

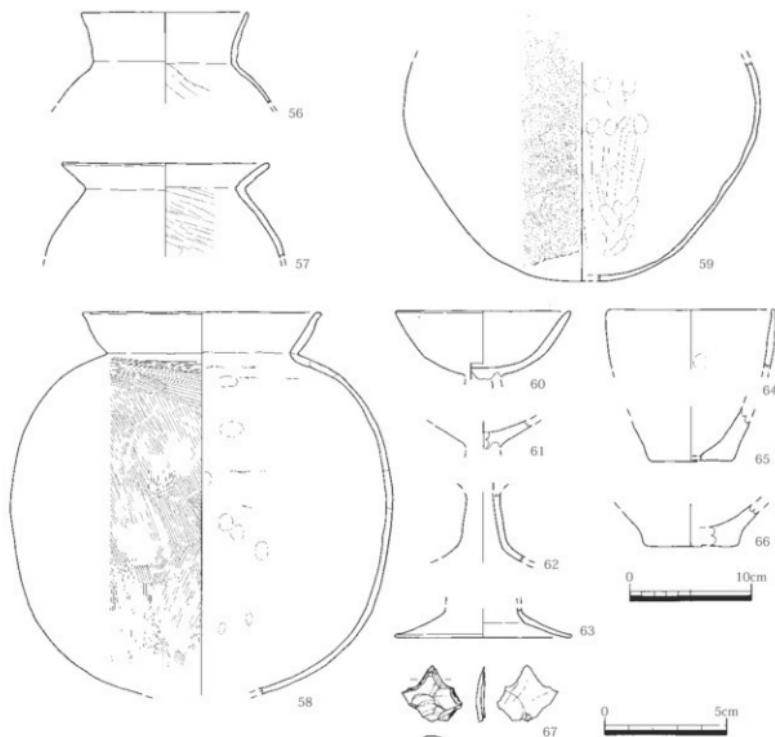


図19 SK1004・1005 出土遺物実測図 (1/4 · 1/2)

14.8cm、立ち上がり高0.7cmである。底体部外面の調整は回転ヘラケズリである。

75・76は須恵器の甕である。75は低い突帯を巡らし、波状文がある。76は内面に自然釉。

77・78は須恵器の高杯である。77は1対の輪状の把手を伴い、凸帯の下に波状文を施す。78は基端部が拡張し、透かしを有する。

79は須恵器の堤瓶で、カギ目が施される。

80・81は土師器の小型丸底壺である。

82は土師器の壺で、外反気味の口縁部である。

83は土師器の二重口縁壺である。

84～86は土師器の高杯で、85は杯部と脚部の接合痕、86は脚中位と基端部に接合痕が見える。

87は土師器の壺で、部分的に煤が付着する。

88～91は弥生土器の壺である。88は口縁端部が上方に若干拡張する。90は外面上にヘラ描き沈線

が施される。91は断面に輪積痕が見える。

92～94は弥生土器の甕である。92・93は逆「L」字状口縁、94は如意状口縁である。

95は弥生土器の蓋である。

96・97は弥生土器の底部である。

98～117は石製品であり、石材はすべてサヌカイトである。98～112は石鎌、113は石錐、114は打製石斧、115・116はスクレイバーで、117は二次加工のある剣片である。

98～105は平基式、106は凸基式、107～112は凹基式である。すべての石鎌は細かな調整が施されている。

113は両面からの調整が施される。

114は両面から調整が施され、打製石錐あるいは打製石臼の可能性も考えられる。

115・116は上下辺に両面からの調整が施される。

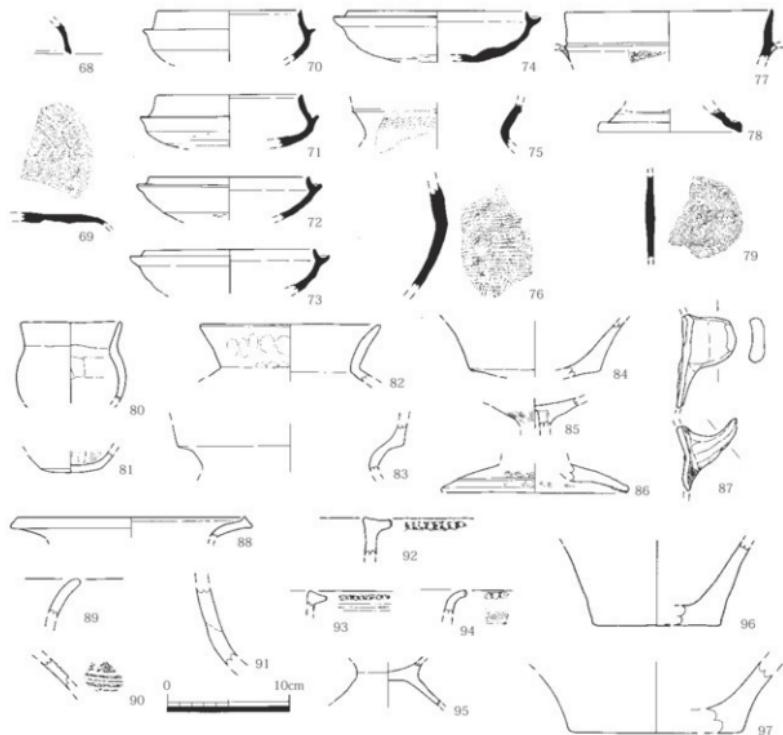


図20 SD1001上・中層出土遺物実測図①(1/4)

117は細かな調整があまり見られない。

118～123は須恵器の杯蓋である。118は口径12.0cmで、口縁部は下外方に下り、端部は面を成す。119・121は口径14.6cmと16.4cmで、口縁部はほぼ垂直に下る。120は口径15.2cmで、口縁部は下外方に下り、端部は丸い。外面に自然釉が部分的に付着する。

124・125は須恵器の杯身である。124は口径13.4cm、立ち上がり高1.0cmであり、器高は低い。125は口径11.0cm、立ち上がり高2.0cmであり、受部は水平に延びる。

126は須恵器の甕、127・128は須恵器の甕であり、127は内外面に自然釉がかかる。

129・130は土師器の小型丸底甕である。

131～133は土師器の甕である。

134・135は土師器の甕の把手である。

136～143は弥生土器である。136～139は壺であり、ヘラ描き沈線・山形文と刻み目のある貼付突帯が施される。

140～142は甕であり、140は柳描直線文を施し、141・142は逆「L」字状口縁であり、142は貼付口縁の接合痕がある。143は底部である。

144～164は石製品で、石材はすべてサヌカイトである。

144～154は石礫である。144・148は平基式、145は異形、146・167・169～151は凹基式、152是有基式であり、153・154は未成品である。

155～157は石錐である。155は頭部と石錐部の境界が不明瞭である。156・157は棒状の形態を呈する。

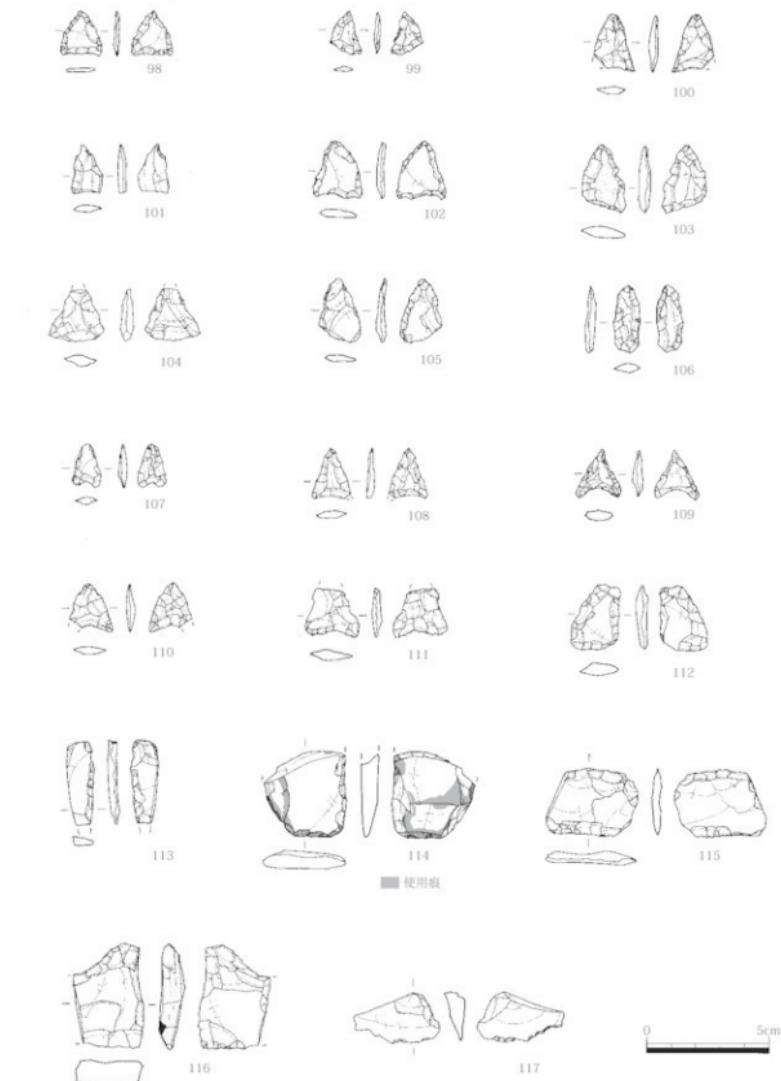


図21 SD1001上・中層出土遺物実測図②(1/2)

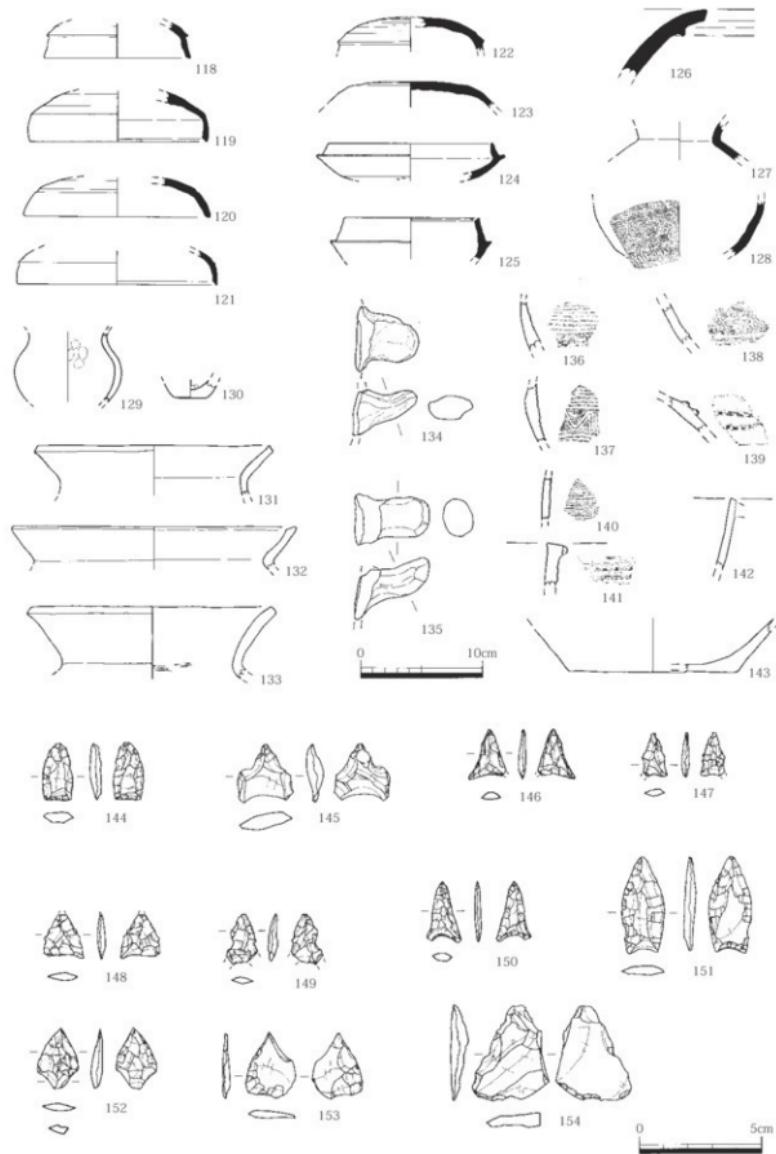


図22 SD1001下層出土遺物実測図① (1/4 · 1/2)

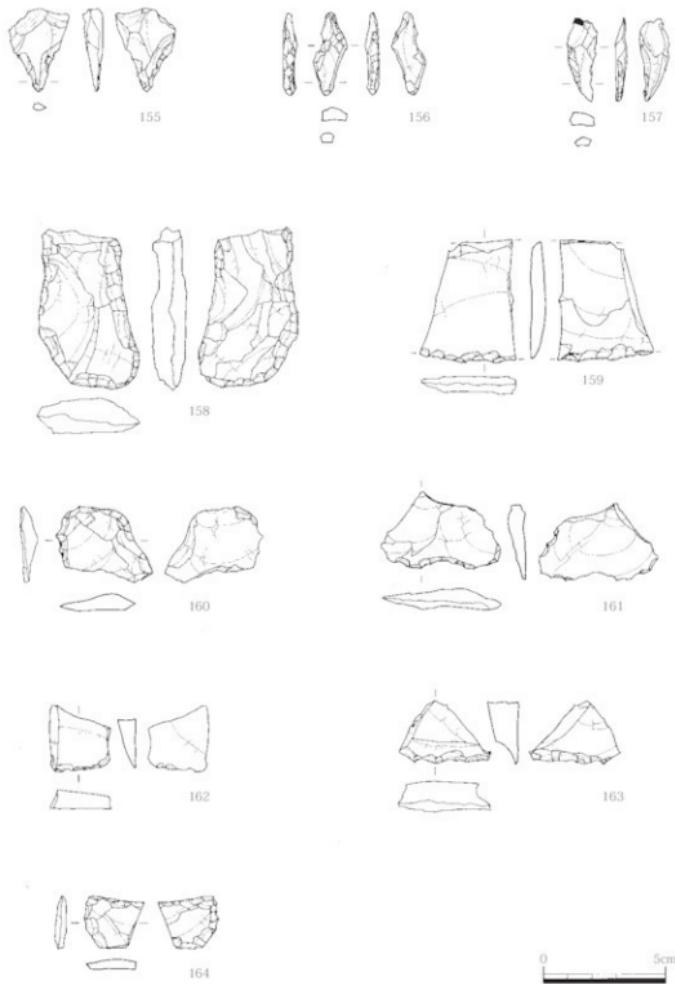


図23 SD1001下層出土遺物実測図② (1/2)

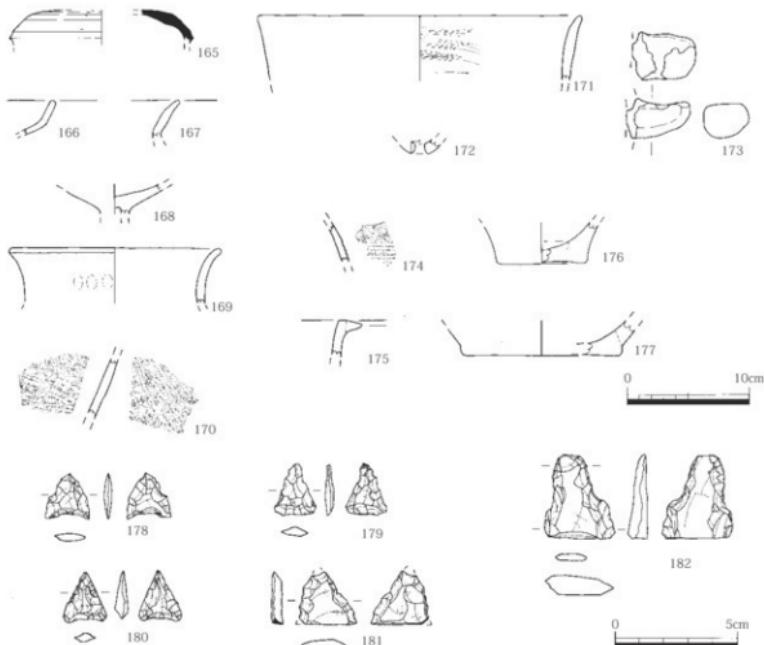


図24 SD1001出土遺物実測図(1/4・1/2)

158は打製石斧であり、両面調整し、刃部に使用痕が明確に残る。

159は打製石包丁であり、刃部を両面から調整する。

160～163はスクレイバーであり、横長剥片素材で、刃部は両面ないし片面から調整する。160は二次加工のある剥片の可能性もある。163は1側面に自然面を残す。

164は二次加工のある剥片であるが、石器未成品の可能性もある。端部に両面調整を施す。

165は須恵器の杯蓋で、外面に棱を持つ。天井部の調整は回転ヘラケズリが施される。

166は土師器の壺である。

167・169・170は土師器の壺で、167・169の口縁部は外反する。170は外面がハケ、内面が板ナデを施す。

168は土師器の高杯である。

171～173は土師器の壺である。171は体部か

ら直線的に口縁部に至る器形である。172は底部であり、中央に孔を有する。173は把手である。

174～177は弥生土器である。174は壺で、へら書き沈線を巡らす。175は逆「L」字状口縁の壺で、貼付口縁の接合痕が見られる。176・177は底部であり、断面に輪積痕がある。

178～182は石製品で、石材はすべてサヌカイトである。

178～181は石鎌である。178は凹基式、179・180は平基式であり、小型である。

182は異形石器で、下方を欠損する。

SD1002(図25・26、写真図版14)

183～187は須恵器の杯蓋である。183は口径11.2cmで、口縁部は下外方に下り、端部は内傾する平面を成す。外面の稜は僅かである。184の口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は内傾する平面を成す。外面の稜はやや鋭い。185・186は口径

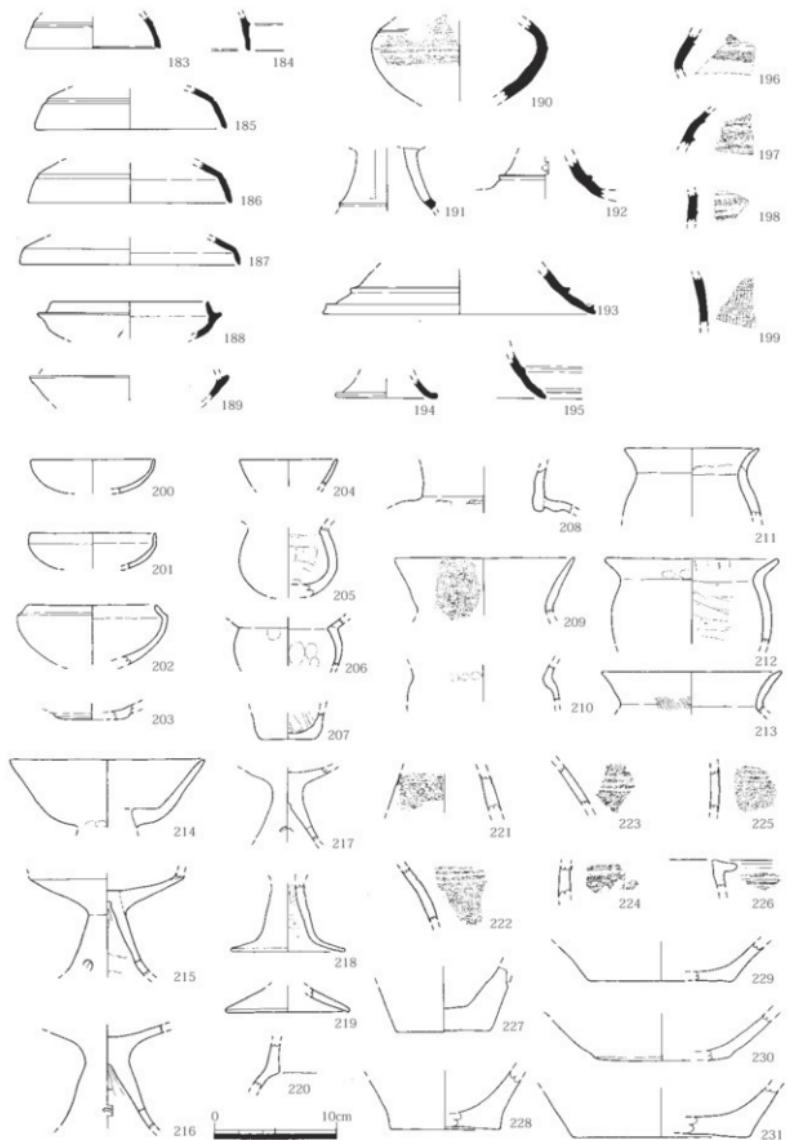


図25 SD1002 出土遺物実測図① (1/4)

15.6cmと16.8cmで、下外方に下り、端部は丸い。187は口径18.0cmで、口縁部は短くほぼ垂直に下り、端部は丸い。

188・189は須恵器の杯身である。188は口径12.8cmで、立ち上がり高さ1.0cmである。受部は水平に延びる。体部外面にヘラ記号が見られる。189は受部が外方に延びる。

190は須恵器の壺で、やや扁平な球形を成し、体部中央に僅かな突帯を廻らせ、沈線との間に波状文を施す。

191～195は須恵器の高杯脚部である。191は方形の透かしを三方向に有する。杯部との接合痕が残る。192は突帯を有し、円形の透かしの一部が残存する。193は底径22.2cmの大型の高杯で、突帯を有し、基端部は上方に細く拡張する。内面には自然釉が部分的にかかる。194は底径8.2cmの小型であり、基端部は丸く収まる。195は断面三角形と方形の突帯を廻らす。

196～199は須恵器の壺である。196～198は低い突帯を廻らせ、その間に波状文を施す。196は内面に自然釉がかかる。

200～203は土師器の杯である。174は口径10.0cmで、浅い半球形の体部からそのまま口縁に至る。201は口径10.2cmで、浅い半球形の体部から口縁部は僅かな段を持って垂直に立ち上がる。202は口径10.6cm、器高4.9cm以上で、体部は半球形を成し、口縁部は段を持って内傾する。203は底径6.1cmの底部である。

204～207は土師器の小型丸底壺である。204はやや内湾気味の口縁部であり、器厚が薄い。205は体部の最大径が中位よりやや下にあり、やや下膨れする器形である。器厚は厚い。206は球形の体部から口縁部が強く屈折して外反する。口縁部と体部の境に接合痕が残る。207は底部が平底である。

208は土師器の壺であり、肩の張る体部から口縁部が直立する。体部外面にヘラの押圧痕が残り、口縁部と体部の境に接合痕がある。

209～213は土師器の甕である。209は長い口縁部が直線的に外反し、外面の調整は縱方向のハケが施される。211～213は短い口縁部が外反する。211は口縁部内面に輪積痕が残る。212の口縁部内面にはヘラの押圧痕が見られ、体部内面はヘラケズリが施される。

214～219は土師器の高杯で、214は杯部、215～217は杯部と脚部の接合部、218・219は脚部である。214は外面に僅かな棱を持って立ち上がり、そのまま口縁部に至る。脚部との接合痕が明瞭である。215は杯部外面に明瞭な稜を持ち、その部分に接合痕を残す。脚部は円孔3個を有し、杯部との接合痕が明瞭である。216は脚部に円孔1個のみ残存する。217は脚部に円孔2個が残存する。218は脚部が大きく外方に広がる。

220は土師器の壺で、段を持ち立ち上がる。

221～223は弥生土器の壺であり、外面にヘラ書き沈線が施される。

224～226は弥生土器の甕である。224は外面に削り出し突帯、225はヘラ書き沈線が施される。226は逆「L」字状口縁であり、口縁部の下にヘラ書き沈線が施される。

227～231は弥生土器の底部である。227は断面に輪積痕が見られ、228は外面に黒斑がある。

232～251は石製品である。232～243は石鎌、244は石錐、245はスクレイパー、246・247は微細剥離痕のある剝片、248は石製模造品、249は石棒、250は用途不明の石製品、251は砥石である。232～248の石材はサヌカイトである。

232・233は凹基式、234～237は平基式、238は凸基式、239～243は石鎌未完成である。232～234は小型であり、側面は両面からの調整が施される。235・236は両面からの細かな調整が施される。237・238は細長い形状で、両面からの細かな調整が施される。239は表面からの調整が施される。240は風化が著しい。243は二次加工のある剝片である可能性も考えられる。

244は両面からの細かな調整が施され、上部側面は自然面である。

245は刃部を両面から調整するが、表面からの調整が強い。

246・247は1面からの調整が施される。

248は石劍の可能性があり、現存長2.9cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmであり、全面に擦痕が見られる。直径2mmの孔は両面から穿孔される。

249は石棒の破片であり、石材は結晶片岩。

250は珪化木であり、用途は不明である。

251は表面と裏面に使用痕が見られ、石材は流紋岩である。石の磨耗状態から判断して砥石の中付近と考えられる。



図 26 SD1002 出土遺物実測図② (1/2)

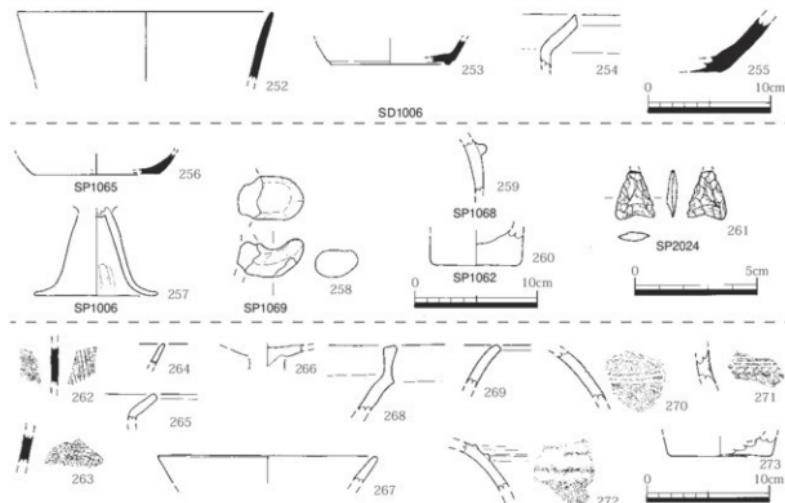


図27 第1・2遺構面出土遺物実測図(1/4・1/2)

SD1006(図27)

252は須恵器の壺で、直線的に外反する。

253は須恵器の杯で、低い高台が付く。

254は土師質土器の鍋である。

255は須恵器の底部である。

ピット

SP1065(図27)

256は須恵器の杯で、体部から底部にかけて火襷が見られる。

SP1006(図27)

257は土師器の高杯で、脚裾部は短く外方に広がる。杯部との接合面が明確に残る。

SP1069(図27)

258は土師器の懸の把手である。

SP1068(図27)

259は土師質土器の鍋である。

SP1062(図27)

260は弥生土器の底部である。

SP2024(図27)

261は四基式石鏡で、石材はサヌカイトである。先端部を欠損する。

近世以降の溝(鉢跡)(図27)

262・263は須恵器の甕である。

264・265・267は土師器の甕である。

266は土師器の高杯で、脚部との接合痕が明瞭である。

268は土師質土器の鍋である。

269は弥生土器の甕である。

270～272は弥生土器の壺である。270はヘラ書き沈線と刺突文を施し、272は2条の貼付突帯を有する。

273は弥生土器の底部である。

第1遺構面出土(図28)

274～276は須恵器に杯蓋である。274・276は口縁部がほぼ垂直に下り、端部は内傾する浅い段を成し、稜は鋭い。275は扁平な擬宝珠様のつまみを付す。

277は須恵器の短頸壺である。

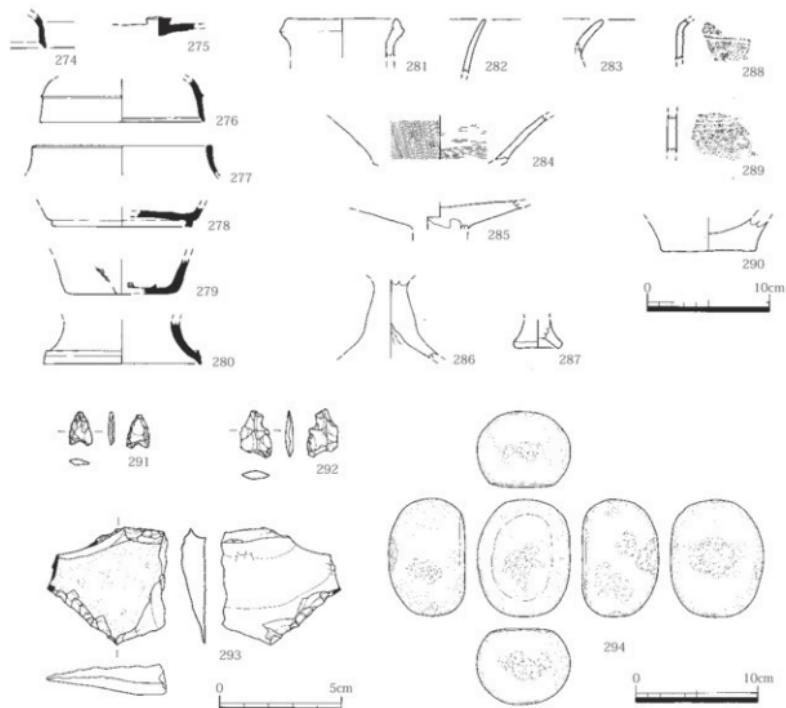


図28 第1造構面出土遺物実測図（1/4・1/2）

278・279は須恵器の杯である。278は断面方形の高台が付き、底部内部が非常に滑らかであることから、硯の可能性も考えられる。279は内外面に火襷がある。

280は須恵器の高杯である。

281・282は土師器の壺である。

283は土師器の甕である。

284～286は土師器の高杯である。284は外面上にハケが施され、段部分の接合痕が明瞭である。285は脚部との接合痕が明瞭である。

287は土師器の製塙土器の脚部である。

288・289は弥生土器の甕で、ヘラ描き沈線が施される。288は如意状口縁である。

290は弥生土器の底部である。

291～294は石製品である。291・292は石鎌、293はスクレイバー、294は敲き石である。

291・292は凹式で、石材はサヌカイトである。小型で、両面からの細かな調整が施される。

293は刃部に両面からの調整が施され、表面に自然面を残す。石材はサヌカイトである。

294は砂岩製で、あばた状の敲打痕がある。

註・引用文献

- 1)マイケルR.ウォーターズ2012『ジオアーケオロジー－地学に基づく考古学－』朝倉書店

参考文献

- 平井 勝 1991 「弥生時代の石器」 ニュー・サイエンス社

第4章 総括

第1節 事業地周辺の堆積環境

事業地は扇状地上に位置するものの、東側の旧河道や西側の開析谷の存在から、複数の要因からなる堆積作用の影響を受け得る位置にあったことを第3章第2節で述べた。合わせて、事業地内で確認した自然流路が、調査区内の層序の形成に影響を与えた可能性も指摘した。具体的には、基本層序II層の形成には、調査区内で検出した南へ屈曲する流路Aが関連していることを、破堤堆積物とみられる堆積物の観察所見から推定した。

この点を念頭とした現地での検証を行っていないため、層序の形成要因の検討は推定の域を出るものではないが、少なくとも事業地周辺では自然流路と層序の関係を的確に把握し、かつ周辺の堆積物の状況を詳細に観察することで、遺跡が形成された場所の地形形成過程をより鮮明に描くことが可能となるだろう。

第2節 主な遺構・遺物について

今回の調査では、主に弥生時代前期・後期、古墳時代前期・後期、古代の遺構・遺物を検出した。なお、弥生時代の遺物のみが出土した遺構は認められなかった。遺構は集落に関連したものが大半だが、一部で当地の条里施工を検討する場合の手掛かりとなりうる遺構も認められた。

ここでは、調査で明らかになった本遺跡の主要な土地利用の時期と言える古墳時代と古代に分けて、土地利用の状況をまとめる。

a 古墳時代の主な遺構と土地利用の状況

古墳時代のなかで帰属時期が明確な遺構としては、古墳時代前期の土坑（SK1001・1002）と後期の溝（SD1001・1002）が挙げられる。

古墳時代前期の遺構としては、地形的に高い調査区南西側で、土器が大量に出土した土坑が複数認められた（SK1001・1002）。出土遺物から、双方は古墳時代前期後葉に帰属する遺構と考えられる。

これらの土坑で特徴的だったのが、双方の土坑と、これ以外に形状や土質等が類似する周辺の複数の土坑（SK1003～1005）も含めて、土坑の形成時にすでに埋没している流路A上に掘削されているという点である（図7）。実際に、これらの土坑を調査している際にも豊富な湧水量があることを確認している。偶然、埋没した自然流路上に土坑が掘削さ

れた可能性も考えられるが、西南側に隣接する浄化槽設置箇所の調査区では、遺構の基盤となるのが当時の地山（基本層序IV層）であり、そこで土坑が認められない点を考慮すると、地下水位の高い埋没した自然流路上を狙って意図的に掘削した遺構である可能性も十分考えられる。このように考えると、これらの遺構は地下水の獲得を目的に掘削された井戸である可能性も考慮すべきかもしれない。なお、東側に隣接する県理蔵文化財センター調査区の北側でも、埋没した自然流路上に、古墳時代前期後葉の遺物を含む井戸（SE101）などが掘削されている¹⁾。これを本調査地との類似性を見るならば、本集落では埋没した自然流路上を狙って、各所で井戸を掘削していた可能性も想定できる。この点は、本遺跡の古墳時代前期後葉の集落のあり方を知る、ひとつの手掛かりとなるだろう。

なお、本調査地のSK1001・1002から出土した土器については、双方の土坑とも土器を意図的に配置したような出土状況であったことから、集落の不用品を単純に廃棄したような状態ではないと考えられる。また、他の遺構で異なる時期の遺物が混在して出土したのに対して、双方の土坑では異なる時期の遺物が少ないという点も指摘できる。前述の遺構の解釈と合わせて考えると、土坑の廃絶時に土器を埋納する行為を行っていた可能性がある点と、出土層位から見ても遺物の一括性が高い点の双方を指摘できる。

次に、古墳時代後期の遺構で特徴的だったのが、SD1001・1002である。このうち、微高地と低地部の境界付近に開削されたSD1001は、幅2.5～4.4m、検出面からの最大深度が約1.5mと、同時期の遺構と考えられるSD1002の規模と比較しても、突出した規模と言える。双方から出土した遺物は、弥生時代の土器や古墳時代中期末・後期後葉の遺物等、相当の時間幅がある。最も新しい遺物から、古墳時代後期後葉の溝と考えられる。

SD1001下層の層相を観察したことろ、この溝に流水があったことが推定できる。地形の変換点付近に位置することや堆積状況・規模などから、基幹水路としての役割を担った溝である可能性が推定できる。残念ながら、他に同時期と明確に位置づけられる遺構が存在しないため、この時期の集落の様子を詳細に述べることはできない。

以上、古墳時代の特徴的な遺構について述べたが、

川島本町遺跡では、少なくとも古墳時代でも2時期の土地利用があったことが分かる。各時期の遺構数が少なく集落の具体的な様子は推測しがたいが、事業地内で竪穴建物跡を確認できなかったことから、集落の中心となる居住域は別の地点にある可能性が考えられる。ただし、層序と遺構の関係を見た場合、流路Aの埋没後に古墳時代前期後葉の土坑が形成されることから、流路Aの埋没は古墳時代前期後葉までには果されたと言える。この流路Aは基本層序II層の供給源となった可能性もある点を考慮すると、当地において自然流路の埋没が果される、すなわち氾濫低地での上方付加が不活発となる古墳時代前期後葉以降に、集落としての活動が本格化するを見ることもできる。基本層序のII層直下で検出できる第2遺構面の遺構からは、帰属時期を推定できる遺物がほとんど出土していないが、この点も踏まえて考えると、事業地周辺の地形としての安定化の時期を古墳時代前期後葉頃と見ることには、一定の蓋然性があると言えるだろう。

なお、SD1001・1002などから古墳時代中期末の遺物も一定数出土している点は留意する必要がある。あるいはSD1001・1002の開削時期を示す遺物の可能性もあるが、少なくとも調査地とその周辺で古墳時代中期末にも一定程度の人的活動があったことを見込める点は、本遺跡を理解する場合に看過できない事象と言える。

b 古代の主な遺構

古代の主な遺構としては、事業地東端の第1遺構面で検出したSD1006が重要である。位置関係から、県埋蔵文化財センター調査区のSD110と同一の溝と考えられる²⁾。この南北溝は、周辺に遺存する条里地割の方位とほぼ一致する。SD1006からは古代に帰属する遺物が出土し、それよりも新しい遺物は見られないことから、溝の形成時期のひとつとして古代が想定される。このように考えると、少なくとも条里に対応する方向の溝が、古代の段階で形成されたという点が推定できる。出土遺物が少ないため詳細な時期比定は困難であるが、さらに周辺での調査成果の蓄積を待って、溝の開削時期や当地における条里施工の時期を検討すべきと考えられる。

註・引用文献

- 1) 香川県埋蔵文化財センター（編）2007『県道高松善通寺線道路改修事業及び県道西植田高松線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 田村遺跡Ⅱ 川島本町遺跡 川島本町南道路』香川県教育委員会

- 2) 註1) 前掲

遺構・遺物觀察表

表3 ピット一覧表

遺構番号	平面形	法量(cm)			遺物	遺構番号	平面形	法量(cm)			遺物
		長軸	短軸	深さ				長軸	短軸	深さ	
第1遺構面											
SP1001	円形	37	36	16	×	SP2001	円形	36	28	16	×
SP1002	円形	43	40	19	×	SP2002	円形	40	25	24	×
SP1003	円形	33	31	18	×	SP2003	円形	50	43	14	×
SP1004	円形	28	24	16	×	SP2004	円形	28	22	24	×
SP1005	円形	43	37	26	×	SP2005	円形	40	12	12	×
SP1006	円形	36	28	21	×	SP2006	円形	28	22	9	×
SP1007	円形	43	40	19	×	SP2007	円形	17	16	6	×
SP1008	円形	37	30	13	×	SP2008	隅丸長方形	40	25	9	×
SP1009	円形	25	24	14	×	SP2009	隅内円形	35	26	7	×
SP1010	円形	24	20	15	×	SP2010	隅丸長方形	32	21	8	×
SP1011	円形	47	32	20	×	SP2011	隅丸二角形	29	22	4	×
SP1012	円形	34	28	12	×	SP2012	不整方形	35	27	8	×
SP1013	円形	36	26	22	×	SP2013	不整円形	36	27	8	×
欠番											
SP1015	縦内円形	35	30	13	×	SP2014	円形	24	18	-	×
SP1016	円形	50	44	20	×	SP2015	不整円形	25	16	7	×
欠番											
SP1018	円形	26	14	14	×	SP2016	円形	17	12	6	×
SP1019	円形	31	25	9	×	SP2017	円形	18	16	10	×
SP1020	円形	26	25	14	×	SP2018	円形	18	17	8	×
SP1021	円形	30	23	12	×	SP2019	円形	21	16	8	×
SP1022	円形	43	38	18	×	SP2020	円形	14	16	4	×
SP1023	円形	31	30	14	×	SP2021	円形	25	17	8	×
SP1024	円形	20	17	9	×	SP2022	不整円形	33	24	13	×
SP1025	縦内円形	45	27	11	×	SP2023	円形	14	8	6	×
SP1026	縦内円形	41	-	16	×	SP2024	隅丸二角形	51	41	21	○
SP1027	長方形	57	43	11	×	SP2025	円形	18	14	5	○
SP1028	円形	41	31	9	×	SP2026	縦円形	13	9	15	×
SP1029	半円形	26	-	8	×	SP2027	横円形	38	34	11	×
SP1030	円形	15	14	10	×	SP2028	-	30	18	7	×
SP1031	円形	23	26	12	×	SP2029	円形	16	19	7	×
SP1032	円形	35	34	15	×	SP2030	横円形	51	26	8	×
SP1033	円形	28	26	8	×	欠番					
SP1034	正方形	32	24	15	×	欠番					
欠番											
SP1036	円形	34	30	10	×	SP2031	円形	18	15	8	×
SP1037	円形	26	25	6	×	SP2032	円形	25	20	7	×
SP1038	円形	32	30	20	×	SP2033	円形	18	15	12	×
SP1039	円形	29	23	14	×	SP2034	縦内円形	53	30	12	×
SP1041	円形	26	21	26	×	SP2035	横内円形	40	26	6	×
SP1042	縦内円形	31	23	18	×	SP2036	不整円形	36	31	19	×
SP1043	縦内円形	41	29	13	×	SP2037	円形	14	13	9	×
SP1044	円形	36	34	17	×	SP2038	円形	18	15	8	×
欠番											
SP1046	円形	28	25	8	×	SP2039	円形	25	20	7	×
SP1047	円形	40	26	8	×	SP2040	円形	16	15	9	×
SP1048	円形	42	41	5	×	SP2041	縦内円形	40	29	8	×
SP1049	円形	40	37	15	×	SP2042	円形	15	12	6	×
SP1050	不整内円形	33	-	16	×	SP2043	円形	56	-	15	×
SP1051	円形	39	38	11	×	SP2044	円形	30	22	8	×
SP1052	円形	55	46	19	×	SP2045	円形	39	22	13	×
SP1053	円形	20	20	11	×						
SP1054	円形	15	12	19	×						
SP1055	円形	15	10	14	×						
SP1056	円形	18	14	6	×						
SP1057	円形	23	18	9	×						
SP1058	円形	32	30	11	×						
SP1059	円形	15	16	-	○						
SP1060	縦内円形	48	36	14	×						
SP1061	円形	30	23	11	×						
SP1062	円形	15	16	-	○						
SP1063	円形	14	12	9	×						
SP1064	円形	11	9	11	×						
SP1065	円形	18	16	24	○						
SP1066	円形	16	13	17	×						
SP1067	円形	15	9	17	○						
SP1068	円形	22	18	16	×						
SP1069	円形	22	18	34	×						
SP1070	円形	25	22	25	×						
SP1071	円形	20	18	37	×						

表4 土器観察表(1)

器名番号	器種	特徴	直径(cm)	調査		名前	内面	外壁	内面	外壁	内面	外壁	内面	外壁	内面	外壁	内面					
				口径	底径																	
1 SK1001	土器器	小型丸底盤	—	3.0	(6.1)	ハナダ、ナダ	指揮压痕のナダ、ナダ、ハナダ	10988/2底白	10987/21底、54 内面	10987/21底、54 内面												
2 SK1001	土器器	小型丸底盤	8.2	—	8.3	ヨコナダ、ナダ	ナダ、指オサニ後に ナダ	10985/4明治開 底	10986/3櫻	10986/3櫻	10986/3櫻											
3 SK1001	土器器	小型丸底盤	8.9	—	7.9	ナダ、指オサニ後に ナダ、ハナダ	ナダ、ハナダ	10988/3洗黄	10988/3洗黄													
4 SK1001	土器器	便	11.3	—	14.5	ナダ	ナダ、ハナダ、指イ ナダ	10986/6赤盤	10988/2底白	10988/2底白												
5 SK1001	土器器	便	12.6	—	13.5	ヨコナダ、ナダ、ハ ナダ	ヨコナダ、ナダ、ハ ナダ	7.5981/1櫻	7.5981/1櫻													
6 SK1001	土器器	便	12.6	—	22.0	板ナダ後にナダ、指 ナダ、ハナダ、ナダ	ナダ、絞り口、ヘア ナダ、ナダ	7.5987/21底、54 内面														
7 SK1001	土器器	便	14.8	—	26.8	ナダ、板ナダ	ナダ、指オサニ、ハ ナダ	10987/41底、54 内面														
8 SK1001	土器器	便	19.4	—	[17.7]	ヨコナダ、ハケ後に ナダ、指オサニ	ヨコナダ、ナダ、ハ ナダ	10988/2底白	10988/2底白													
9 SK1001	土器器	高杯	16.6	—	[3.3]	ナダ、厚底	ナダ後にヘアマガキ	2.5986/1黄	10989/31底、54 内面	10989/31底、54 内面												
10 SK1001	土器器	高杯	—	12.4	[7.1]	ナダ	ナダ、ハナダ、指イ ナダ	10988/2底白	10988/2底白													
11 SK1001	土器器	高杯	—	—	7.3	ナダ、ヨコナダ	絞り口	10987/21底、54 内面														
12 SK1001	供生土器	坐	—	—	[2.6]	ハラ崎き詫4条。朝 文安、山形文	厚底	7.5986/31底、54 内面	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白											
13 SK1001	供生土器	(底部)	—	[7.6]	[2.2]	ナダ	厚底	10985/1底白	10986/1底白	10986/1底白	10986/1底白											
14 SK1001	供生土器	(底部)	—	[6.6]	[2.6]	ナダ	指オサニ後にナダ	10985/6明治開 底	10986/41底、54 内面	10986/41底、54 内面												
18 SK1002	土器器	小型神	7.2	4.3	5.1	ナダ、指オサニ後に ナダ	ナダ、指オサニ、指 ナダ	2.5986/2底白	2.5987/2底黄	2.5987/2底黄	2.5987/2底黄											
19 SK1002	(上層)	土器器	小型丸底盤	7.61	—	[5.1]	ナダ、板ナダ	ナダ、板ナダ	10984/4底	10984/2底黄	10984/2底黄	10984/2底黄	10984/2底黄									
20 SK1002	土器器	小型丸底盤	7.40	—	[8.1]	指オサニ後にヨコナ ダ、指オサニ後にナ ダ	指オサニ後にヨコナ ダ、指オサニ後にナ ダ	10986/3底、54 内面	10986/3底、54 内面													
21 SK1002	土器器	小型丸底盤	7.7	—	[7.6]	横方向のナダ、ナ ダ、板ナダ	横方向のナダ、ナ ダ、板ナダ	10985/2底黄	10985/2底黄	10985/2底黄												
22 SK1002	土器器	小型丸底盤	—	—	[6.9]	ナダ、指オサニ、ハ ナダ	ナダ、指オサニ	2.5986/2底黄	10982/1底白	10982/1底白	10982/1底白	10982/1底白										
23 SK1002	土器器	小型丸底盤	9.8	—	[5.6]	指オサニ後にヨコナ ダ、ナダ	ナダ、指ナダ	10987/2底、54 内面	10988/1底黄	10988/1底黄	10988/1底黄	10988/1底黄										
24 SK1002	(上層)	土器器	小型丸底盤	9.2	—	[4.3]	厚底	厚底	2.5986/9底	10988/1底白	10988/1底白	10988/1底白	10988/1底白	10988/1底白								
25 SK1002	土器器	小型丸底盤	9.0	—	—	厚底	ナダ、ハラマガキ、 厚底	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白											
26 SK1002	(上層)	土器器	坐	[13.6]	—	[2.6]	ナダ	ナダ	10988/4洗黄	10988/4洗黄	10988/4洗黄	10988/4洗黄	10988/4洗黄									
27 SK1002	(上層)	土器器	便	—	[9.0]	—	[5.2]	厚底(部分的に指オ サニ)	厚底(部分的に指オ サニ)	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面									
28 SK1002	供生土器	便	—	—	[8.9]	ハナ、ナダ	指ナダ、指オサニ	10988/2底白	10988/1底白	10988/1底白	10988/1底白	10988/1底白										
29 SK1002	土器器	便	—	—	[14.6]	—	[6.7]	厚底	厚底	10987/4底、54 内面	10987/4底、54 内面	10987/4底、54 内面	10987/4底、54 内面	10987/4底、54 内面								
30 SK1002	(下層)	土器器	便	—	—	[6.6]	ヨコナダ、板ナダ、 ナダ	ナダ	10987/4底、54 内面	10988/1櫻	10988/1櫻	10988/1櫻	10988/1櫻	10988/1櫻								
31 SK1002	土器器	便	—	—	23.8	厚底	ハラナダ、ナダ、指 オサニ、指ナダ	10988/3洗黄	10988/3洗黄	10988/3洗黄	10988/3洗黄											
32 SK1002	土器器	便	—	—	[12.7]	—	[18.9]	厚底(一部に板ナダ 接着)	厚底(一部に板ナダ 接着)	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面								
33 SK1002	土器器	便	—	—	[14.6]	—	[18.3]	ヨコナダ、板ナダ、 ナダ	ナダ、厚底	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面								
34 SK1002	土器器	便	—	—	[14.6]	—	20.6	厚底(一部にハナ、 ナダ)	ナダ	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面	10987/2底、54 内面								
35 SK1002	土器器	高杯	—	—	17.4	[12.2]	11.9	ナダ、屋内向のナ ダ	ナダ、絞り口	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白							
36 SK1002	(上層)	土器器	高杯	—	—	[6.6]	厚底(一部にナダ接 着)	ナダ、未調整	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白									
37 SK1002	土器器	高杯	—	—	—	[7.6]	屋内向のナダ、厚 底	厚底	10988/3底、54 内面	10988/3底、54 内面	10988/3底、54 内面	10988/3底、54 内面										
38 SK1002	(上層)	土器器	高杯	—	—	[7.7]	ナダ	ナダ、絞り口	10988/6底白	10988/6底白	10988/6底白	10988/6底白	10988/6底白	10988/6底白								
39 SK1002	土器器	高杯	—	—	[5.1]	ナダ	ナダ、絞り口、屋内向 のナダ	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白	10988/2底白										

土器観察表 (2)

測定番号	測定部位名	測量	基準	直徑 (cm)		測量	長さ		測定	測定	測定	測定	
				外径	内径		外径	内径					
40	SK1002 (下層)	土師器	高杯	—	—	[8.4]	厚底	厚底、へラ底	10.08/6.9壁 10.08/4.0底	—	—	—	
41	SK1002 (上層)	土師器	高杯	—	—	[6.8]	ナダ	ナダ、へラ削り後に ナダ	7.39/6.4底 7.39/1.6底	—	—	—	
42	SK1002	土師器	高杯	—	—	[11.8]	[2.1]	厚底	ナダ	7.39/7.4底 7.39/1.5底	—	—	
43	SK1002 (中層)	土師器	高杯	—	—	[13.4]	[4.3]	ナダ	ナダ	7.39/8.2底 7.39/2.8底	—	—	
44	SK1002 (上層)	土師器	高杯	—	—	[17.7]	[2.6]	厚底、ナダ	厚底	10.08/6.9壁 10.08/4.5底	—	—	
45	SK1002 (中層)	土師器	製塙土器	—	—	[5.6]	[2.4]	厚底	厚底	10.08/4.1底 10.08/2.5底	—	—	
46	SK1002 (中層)	土師器	蓋	—	—	[1.8]	刻み目、ナダ	貼付突起、ナダ	10.08/8.3底 10.08/2.8底	—	—	—	
47	SK1002 (上層)	供生土器	便	—	—	[1.9]	ナダ、刻み目、難讀 直線文	ナダ	10.08/5.2底 10.08/2.5底	10.08/7.4底 10.08/4.5底	—	—	
48	SK1002 (中層)	供生土器	便	—	—	[2.6]	厚底、刻み目、へラ 沈鉢 2条	厚底	7.39/6.6底 7.39/1.5底	7.39/6.2底 7.39/1.5底	—	—	
49	SK1002	供生土器	便	—	—	[2.8]	厚底、刻み目	ナダ	10.08/6.9壁 10.08/4.6壁	10.08/7.6壁 10.08/4.6壁	—	—	
50	SK1002 (上層)	供生土器	便	—	—	[2.8]	厚底、へり巻き沈鉢 2条	厚底	7.39/7.9壁 7.39/2.8底	—	—	—	
51	SK1002 (上層)	供生土器	(底部)	—	—	[2.3]	ナダ、厚底	ナダ	10.08/7.3底 10.08/1.5底	10.08/3.1底 10.08/1.5底	—	—	
52	SK1003 *	土師器	蓋	[13.6]	—	[7.4]	厚底	厚底 (へラナダ後 存在)	10.08/6.9壁 10.08/2.8底	—	—	—	
56	SK1003 *	土師器	便	[16.1]	—	[7.7]	ヨコナダ、厚底	へラナダ、厚底	10.08/7.2底 10.08/2.8底	10.08/6.6壁 10.08/2.8底	—	—	
57	SK1003 *	土師器	便	[19.4]	—	[21.3]	ヨコナダ、ハケ、ナ エ、ナダ	ヨコナダ、面オサ ギ、ナダ	10.08/5.4底 10.08/2.5底	10.08/6.6壁 10.08/2.5底	—	—	
58	SK1003 *	土師器	便	—	—	[18.6]	ハケ	指オサエ、指ナダ	10.08/7.3底 10.08/2.5底	10.08/6.9壁 10.08/2.5底	—	—	
59	SK1003 *	土師器	便	—	—	[14.6]	ナダ	ナダ	10.08/7.2底 10.08/2.5底	10.08/6.9壁 10.08/2.5底	—	—	
60	SK1003 *	土師器	高杯	[14.2]	—	[5.6]	厚底	ナダ	10.08/7.2底 10.08/2.5底	10.08/6.9壁 10.08/2.5底	—	—	
61	SK1003 *	土師器	高杯	—	—	[2.4]	ナダ	ナダ	7.39/8.4洗黄 壁	10.08/7.6壁 10.08/4.6壁	—	—	
62	SK1003 *	土師器	高杯	—	—	[5.8]	厚底	厚底	7.39/6.6壁 7.39/4.5底	—	—	—	
63	SK1003 *	土師器	高杯	—	—	[14.6]	[2.4]	ナダ	ナダ	7.39/6.6底 7.39/2.5底	10.08/7.4底 10.08/2.5底	—	—
64	SK1003 *	土師器	製塙土器	[13.4]	—	[4.8]	ナダ	ナダ、指オサエ	7.39/7.3底 7.39/2.5底	10.08/6.9壁 10.08/2.5底	—	—	
65	SK1003 *	供生土器	(底部)	—	—	[6.6]	[4.5]	ナダ	厚底	7.39/8.3洗黄 壁	10.08/2.8底 10.08/2.8底	—	—
66	SK1003 *	供生土器	(底部)	—	—	[7.6]	[3.4]	厚底	厚底	10.08/8.2底 10.08/2.8底	—	—	
68	SD1001 上・中層	酒呑器	杯蓋	—	—	[2.5]	回転ナダ	回転ナダ	8.6/8 8.6/8	—	—	—	
69	SD1001 上・中層	酒呑器	杯蓋	—	—	[1.6]	回転ナダ、回転へラ 削り	回転ナダ	8.6/8 8.6/8	—	—	—	
70	SD1001 上・中層	酒呑器	杯身	[11.8]	—	[4.1]	回転ナダ、回転へラ 削り	回転ナダ	8.6/8 8.6/8	—	—	—	
71	SD1001 上・中層	酒呑器	杯身	[11.8]	—	[4.3]	ナダ、底部回転 へラ削り	回転ナダ	8.6/8 8.6/8	—	—	—	
72	SD1001 上・中層	酒呑器	杯身	[13.2]	—	[3.6]	回転ナダ、回転へラ 削り	回転ナダ	7.09/4.1底 7.09/2.8底	—	—	—	
73	SD1001 上・中層	酒呑器	杯身	[14.6]	—	[3.5]	回転ナダ	回転ナダ	8.6/8/1青底 8.6/8/1青底	—	—	—	
74	SD1001 上・中層	酒呑器	杯身	[14.8]	—	[4.2]	回転ナダ、回転へラ 削り	回転ナダ	8.6/8 8.6/8	—	—	—	
75	SD1001 上・中層	酒呑器	便	—	—	[3.7]	波状文	ナダ	8.6/8 8.6/8	7.39/4.1底 7.39/2.8底	—	—	
76	SD1001 上・中層	酒呑器	便	—	—	[8.6]	平行タタキのちナダ	自然軸	8.6/8 8.6/8	5.97/4.7壺オ リーブ	—	—	
77	SD1001 上・中層	酒呑器	高杯	[17.6]	—	[4.1]	回転ナダ、波状文	ナダ	8.6/8 8.6/8	5.97/6.1底 5.97/4.1底	—	—	
78	SD1001 上・中層	酒呑器	西杯	[11.6]	—	[1.9]	回転ナダ	回転ナダ	8.6/8 8.6/8	—	—	カクシ	
79	SD1001 上・中層	酒呑器	被瓶	—	—	[6.8]	カキ貝	ナダ	8.6/8 8.6/8	—	—	—	
80	SD1001 上・中層	土師器	小型丸洗皿	[8.2]	—	[6.6]	ナダ	ナダ、へラナダ	10.08/7.3底 10.08/4.5底	10.08/7.3底 10.08/4.5底	—	—	

土器観察表(3)

番号	器種名	種類	形態	直徑(cm)		測量		直徑		内面		直徑		内面		形状	構成	備考
				外径	底径	底高	底厚	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面			
81	SD1001 上・中層	土器器	小型丸底器	—	(5.2)	(1.8)	—	ナダ、指オサエ後に ナダ	摩滅	10986/4に.5cm 底盤	10986/3に.5cm 底盤	1~3mmの石英、白色 斑状	1~3mmの石英、白色 斑状	良				
82	SD1001 上・中層	土器器	盤	(4.6)	—	(4.7)	—	ナダ、指オサエ後に ナダ	ナダ、摩滅	10986/4浅黄褐	10986/3浅黄褐	1mm以下の石英、白 色斑状	1mm以下の石英、白 色斑状	良				
83	SD1001 上・中層	土器器	二重の縁差	—	—	(4.6)	—	摩滅	摩滅	10986/3浅黄褐	10987/4に.5cm 底盤	1~3mmの石英、白 色斑状	1~3mmの石英、白 色斑状	良				
84	SD1001 上・中層	土器器	高杯	—	—	(4.5)	—	ナダ、摩滅	摩滅	10986/4浅黄褐	10987/6明黃褐	1~3mmの石英少 量	1~3mmの石英少 量	良				
85	SD1001 上・中層	土器器	高杯	—	—	(2.3)	—	ハケ、摩滅	ナダ	10987/2に.5cm 底盤	10987/2に.5cm 底盤	1~3mmの石英少 量。右 側	1~3mmの石英少 量。右 側	良	接合痕			
86	SD1001 上・中層	土器器	高杯	—	(15.0)	(2.3)	—	ナダ、ハケ、ハケ裏 にナダ	ハケ後にナダ	7.5006/6明黃 褐	7.5006/7底盤	1mm以下の白色斑 状	1mm以下の白色斑 状	良				
87	SD1001 上・中層	土器器	瓶	—	—	—	—	指ナダ、ハケ	指オサエ	10987/2に.5cm 底盤	10988/2底白	1mm以下の石英、白 色斑状	1mm以下の石英、白 色斑状	良				
88	SD1001 上・中層	陶生土器	蓋	(18.8)	—	(1.7)	—	ヨコナダ	ヨコナダ	7.5006/6明黃 褐	7.5006/6明黃 褐	1mm以下の石英、白 色斑状	1mm以下の石英、白 色斑状	良				
89	SD1001 上・中層	陶生土器	蓋	—	—	(3.2)	—	ナダ	ナダ	10986/6底盤	10986/6底盤	1~3mm以下の白色斑 状少 量	1~3mm以下の白色斑 状少 量	良				
90	SD1001 上・中層	陶生土器	蓋	—	—	(2.7)	—	ヘラ彫き沈線4条、 ナダ	ナダ	10986/6に.5cm 底盤	10985/2底黃褐	1~3mmの石英少 量	1~3mmの石英少 量	良				
91	SD1001 上・中層	陶生土器	蓋	—	—	(6.4)	—	ナダ	ナダ	10988/1底白	10988/1RC	1~3mmの石英、左 側	1~3mmの石英、左 側	良	接合痕			
92	SD1001 上・中層	陶生土器	便	—	—	(3.1)	—	ナダ、斜み凹	ナダ	2.5006/6に.5cm 底	2.5006/6底盤	1~3mmの石英、左 側	1~3mmの石英、左 側	良				
93	SD1001 上・中層	陶生土器	便	—	—	(1.4)	—	斜み凹、二つ組合式 斜み凹、摩滅	摩滅	10988/3浅黄褐	10988/3底黃褐	2~3mmの石英、左 側	2~3mmの石英、左 側	良				
94	SD1001 上・中層	陶生土器	便	—	—	(2.6)	—	斜み凹、ナダ、ヘラ 彫き沈線5条	ナダ	10985/6明赤	10985/6明赤	2~3mmの石英少 量	2~3mmの石英少 量	良				
95	SD1001 上・中層	陶生土器	蓋	—	—	(3.4)	—	ナダ	摩滅	10986/2底黃褐	10984/2底黃褐	1~3mmの石英少 量	1~3mmの石英少 量	良				
96	SD1001 上・中層	陶生土器	(底部)	—	(10.6)	(7.6)	—	摩滅	摩滅	10988/4底白	10988/4底白	1~3mmの石英、左 側	1~3mmの石英、左 側	良				
97	SD1001 上・中層	陶生土器	(底部)	—	(15.2)	(5.8)	—	摩滅	摩滅	2.5005/6明赤 褐	2.5005/6明赤 褐	1mm以下の石英、左 側	1mm以下の石英、左 側	良				
118	SD1001 下層	酒器器	杯蓋	(12.6)	—	(2.9)	—	回転ナダ、回転ヘラ 削り	回転ナダ	5.5cm	5.5cm	—	—	—				
119	SD1001 下層	酒器器	杯蓋	(14.6)	—	(4.1)	—	回転ナダ、回転ヘラ 削り	回転ナダ	7.5005/1底白	7.5005/1底白	3mm以下との石英、左 側	3mm以下との石英、左 側	良				
120	SD1001 下層	酒器器	杯蓋	(15.2)	—	(3.2)	—	回転ナダ(右時計回 り)、回転ヘラ削り	回転ナダ	5.5cm	5.5cm	1~3mmの石英少 量	1~3mmの石英少 量	良				
121	SD1001 下層	酒器器	杯蓋	(16.4)	—	(2.8)	—	回転ナダ	回転ナダ	5.5cm	5.5cm	—	—	—				
122	SD1001 下層	酒器器	杯蓋	(10.4)	—	(4.9)	—	回転ナダ	回転ナダ	5.5cm	5.5cm	3mm以下の長石、赤 色	3mm以下の長石、赤 色	良				
123	SD1001 下層	酒器器	杯蓋	—	—	(2.1)	—	回転ナダ、回転ヘラ 削り	回転ナダ	5.5cm	5.5cm	—	—	—				
124	SD1001 下層	酒器器	杯身	(13.4)	—	(3.6)	—	回転ナダ、回転ヘラ 削り	回転ナダ	5.5cm	5.5cm	—	—	—				
125	SD1001 下層	酒器器	杯身	(11.6)	—	(3.4)	—	回転ナダ、ナダ	回転ナダ	5.5cm	5.5cm	—	—	良好				
126	SD1001 下層	酒器器	便	—	—	(5.5)	—	回転ナダ	回転ナダ	5.5cm	5.5cm	1~3mm以下の白色斑 状少 量	1~3mm以下の白色斑 状少 量	良				
127	SD1001 下層	酒器器	蓋	—	—	(3.1)	—	回転ナダ	回転ナダ	5.5cm	5.5cm	0.5mm以下の白色斑 状少 量	0.5mm以下の白色斑 状少 量	良	内外面に自然剥 離がある(オリーブIC)			
128	SD1001 下層	酒器器	蓋	—	—	(4.6)	—	回転ナダ、回転ヘラ 削り、平行タスキ	回転ナダ	5.5cm	5.5cm	0.5mm以下の白色斑 状少 量	0.5mm以下の白色斑 状少 量	良				
129	SD1001 下層	土器器	小型丸底器	—	—	(5.7)	—	摩滅	ナダ、指オサエ	2.5006/6底	10987/3に.5cm 底盤	0.5mm以下の石英、白 色	0.5mm以下の石英、白 色	良				
130	SD1001 下層	土器器	小型丸底器	—	2.8	(1.6)	—	ナダ	指オサエ、ナダ	2.5005/1底白	5.5cm	1mmの石英、0.5mm以 下との白色斑状少 量	1mmの石英、0.5mm以 下との白色斑状少 量	良				
131	SD1001 下層	土器器	便	(19.6)	—	(4.1)	—	ナダ	ナダ	10986/4に.5cm 底盤	10986/4に.5cm 底盤	1mm以下の石英、左 側	1mm以下の石英、左 側	良				
132	SD1001 下層	土器器	便	(23.3)	—	(3.5)	—	摩滅	摩滅	7.5006/4に.5cm 底 1~1.5cm	7.5006/4に.5cm 底 1~1.5cm	3mm以下の石英、金 屬質、白色斑状多 量	3mm以下の石英、金 屬質、白色斑状多 量	良				
133	SD1001 下層	土器器	便	(19.6)	—	(5.9)	—	ナダ	ナダ、ハケ	2.5008/4底黃	10985/6明赤	3mm以下の石英、白 色	3mm以下の石英、白 色	良				
134	SD1001 下層	土器器	瓶	—	—	—	—	指ナダ	T.高級、指オサエ	7.5007/4に.5cm 底 1~1.5cm	7.5007/4に.5cm 底 1~1.5cm	3mm以下の石英、1mm以 下の白色	3mm以下の石英、1mm以 下の白色	良				
135	SD1001 下層	土器器	瓶	—	—	—	—	指ナダ、指オサエ	ナダ	10988/2底黃	10982/1黒	3mm以下の石英、左 側	3mm以下の石英、左 側	良				
136	SD1001 下層	陶生土器	蓋	—	—	(4.1)	—	ヘラ彫き沈線、ナダ	ナダ	10988/2底白	10988/2底白	3mm以下の石英、左 側	3mm以下の石英、左 側	良				

土器観察表(4)

記号 番号	品種名	種類	形態	直徑(cm)		高さ		内面		外観		形状	構成	備考	
				口径	底径	高さ	内面	ナデ	ナデ	内面	外観				
137	SD1001 下部	陶生土器	直	—	—	(4.8)	(上に) 北風 6隻、 山形文、(下に) 沢 蟹 2隻	ナデ	NA/暗灰	NA/暗灰	0.1~2mmの石英、黄 石	良			
138	SD1001 下部	陶生土器	直	—	—	(3.1)	ハラ彫沈跡 2条、ナ デ	摩滅	2.97/3浅黄	10.98/3浅黄	3mm以下の石英、黄 色	良			
139	SD1001 下部	陶生土器	直	—	—	(2.6)	船型付け突帯、矧み 丸、ナデ	ナデ	10.98/3浅黄	10.98/2灰白	2~3mmの石英、小石 英、0.5mm以下の白 色粒、黑色粒	良			
140	SD1001 下部	陶生土器	直	—	—	(3.3)	船形底露文彫条	摩滅	7.1098/4浅黄	手崩	0.1~2mmの石英、黄 石	良			
141	SD1001 下部	陶生土器	直	(23.6)	—	(3.6)	ハラ彫き底縁、ナデ	ナデ	2.97/3浅黄	13.7/3暗オーバ ラフ	2~3mmの石英、0.5 mm以下の白色粒	良			
142	SD1001 下部	陶生土器	直	—	—	(3.6)	ナデ	ナデ	10.98/2灰白	10.98/2灰白	1mm以下の白色粒、 黑色粒少量	良	接合痕		
143	SD1001 下部	陶生土器	(底部)	—	(13.6)	(4.4)	摩滅	ナデ	7.1098/4浅黄	手崩	3mm以下の石英、黄 色	良			
165	SD1001	酒呑器	杯蓋	—	—	(2.8)	回転ナデ、回転ヘラ 削り	回転ナデ	NA/灰	NA/灰	0.5mm以下の白色粒 少量	良			
166	SD1001	土師器	直	—	—	(2.6)	摩滅	摩滅	10.987/312.54/ 黄壁	10.987/312.54/ 黄壁	1mm以下の白色粒	不良			
167	SD1001	土師器	直	—	—	(3.1)	ヨコナデ	ナデ	7.1097/412.54/ 1-縦	7.1097/412.54/ 1-縦	3mmの石英、1.0mm以下 の白色粒多量	良			
168	SD1001	土師器	高杯	—	—	(2.4)	摩滅	摩滅	10.987/21.54/ 黄壁	10.987/21.54/ 黄壁	3mm以下の石英、 白色粒、黑色粒	良			
169	SD1001	土師器	直	便	(17.1)	(4.5)	ヨコナデ、ナデ、指 オサニ	ナデ	10.985/312.54/ 黄壁	10.985/312.54/ 黄壁	1.0mm以下の石英、 0.5mm以下の白色粒 少量	良			
170	SD1001	土師器	直	—	—	(4.8)	ハケ	板ナデ	10.985/6明赤	10.985/412.54/ 1-縦	2mm以下の白色粒、 黑色粒、黑色粒多量	良			
171	SD1001	土師器	瓶	(26.4)	—	(5.3)	摩滅	ハケ、ハラナデ、ナ デ	10.987/312.54/ 1-縦	2.97/3浅黄	2.97/311.54/ 1-縦	1mm以下の石英、 白色粒、黑色粒多量	良		
172	SD1001	土師器	瓶	—	—	(1.2)	ナデ	ナデ	7.1097/412.54/ 1-縦	—	—	良			
173	SD1001	土師器	瓶	—	—	—	—	—	7.1098/412.54/ 1-縦	—	3mm以下の石英、 白色粒、黑色粒、黑色 粒多量	良	外面一面に黒斑 付		
174	SD1001	陶生土器	直	—	—	(3.6)	ナデ、ハラ彫沈跡 6 隻以上、	ナデ	10.984/41.54/ 黄壁	10.987/1灰白	1mm以下の石英、 黄色	良			
175	SD1001	陶生土器	直	—	—	(3.6)	摩滅	摩滅	7.1098/3浅黄	7.1097/6縦	3mm以下の石英、 白色粒、黑色粒	良	接合痕		
176	SD1001	陶生土器	(底部)	—	(7.3)	(3.3)	ナデ	摩滅	10.97/4/15.54/ 1-縦	10.97/1灰	1~2mmの石英、白色 粒多量	良	接合痕		
177	SD1001	陶生土器	(底部)	—	(12.8)	(2.9)	摩滅	摩滅	2.996/6明黄	2.998/3浅黄	3mm以下の石英、 白色粒、黑色粒多量	良			
183	SD1002	酒呑器	杯蓋	(11.2)	—	(2.6)	回転ナデ	回転ナデ	NA/灰	NA/灰	—	良好			
184	SD1002	酒呑器	杯蓋	—	—	(2.6)	回転ナデ	回転ナデ	10.982/1灰	7.107/1灰白	0.5mm以下の白色粒 少量	良			
185	SD1002	酒呑器	杯蓋	(15.6)	—	(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	NA/灰	NA/灰白	0.5mm以下の白色粒 少量	良			
186	SD1002	酒呑器	杯蓋	16.8	—	(3.3)	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	NA/灰	NA/灰白	—	良好			
187	SD1002	酒呑器	杯蓋	(18.6)	—	(2.2)	回転ナデ	回転ナデ	10.7/1灰白	NA/灰	—	良			
188	SD1002	酒呑器	杯身	12.8	—	(3.6)	回転ナデ	回転ナデ	NA/灰	NA/灰	2mmの小石、0.5mm以 上の白色粒	良好	二つ記号		
189	SD1002	酒呑器	杯身	—	—	(2.6)	回転ナデ	回転ナデ	10.98/1灰白	10.98/1灰白	0.5mm以下の白色粒 黑色粒少量	良			
190	SD1002	酒呑器	直	—	—	(6.6)	ナデナダ、ナデ、表 状文、波紋、沈縁	回転ナデ	NA/灰	NA/灰白	0.5mm以下の白色粒 黑色粒	良			
191	SD1002	酒呑器	高杯	—	—	(5.6)	回転ナデ	回転ナデ	NA/灰白	NA/灰	3mm以下の石英、石 英	良	接合痕、スカシ (無定形)剥離		
192	SD1002	酒呑器	高杯	—	—	(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	NA/灰	NA/灰	0.5mm以下の白色粒 少量	良好	五		
193	SD1002	酒呑器	高杯	—	(22.2)	(3.7)	回転ナデ	回転ナデ	2.997/1灰白	2.997/1灰白	—	良	内部に自然結晶 部分的に残存		
194	SD1002	酒呑器	高杯	—	(8.2)	(1.6)	回転ナデ	回転ナデ	NA/灰	NA/灰	0.5mm以下の白色粒	良			
195	SD1002	酒呑器	高杯	—	—	(3.9)	回転ナデ	ナデ	2.998/2灰白	2.998/1灰白	0.5mm以下の白色粒 少量	良			
196	SD1002	酒呑器	直	—	—	(3.2)	回転ナデ、表状文、 沈縁 1隻	回転ナデ	NA/灰	NA/灰	0.5mm以下の白色粒 少量	良	内部に自然結		
197	SD1002	酒呑器	直	—	—	(2.6)	回転ナデ、表状文	回転ナデ	NA/灰	NA/灰	0.5mm以下の白色粒 少量	良			
198	SD1002	酒呑器	直	—	—	(2.6)	回転ナデ、表状文	回転ナデ	NA/灰	NA/灰	0.5mm以下の白色粒 少量	良好			

土器観察表(5)

遺構 番号	遺物名	種類	形態	寸法(cm) 口径 底径 高さ	表面		内部		形状	構成	備考	
					内面	外面	内面	外面				
199	SD1002	素盞器	壺	—	—	(4.1) 手平タケのちカキ口	ナデ	SD1002/暗褐色	SD1002/灰褐色	0.5mm以下の白色粘土	良	
200	SD1002	土師器	杯	(10.6)	—	(2.7) 厚底	厚底 (ナデが一部保存有)	7.0mm/4cm底 内壁	7.0mm/4cm底 外壁	3mmの小石粒、0.5mm以下の白色粘土	良	
201	SD1002	土師器	杯	10.2	—	(2.9) 厚底	厚底	7.0mm/4cm底 内壁	7.0mm/4cm底 外壁	0.5mm以下の白色粘土、赤色粘土	良	
202	SD1002	土師器	杯	(10.6)	—	(4.9) 厚底	厚底	7.0mm/6cm底 内壁	7.0mm/3cm底 外壁	3mmの石英、0.5mm以下の白色粘土	良	
203	SD1002	土師器	杯	—	(6.1)	(1.3) ナデ	ナデ	7.0mm/3cm底 内壁	7.0mm/2cm底 外壁	1mm以下の石英、白色粘土、黑色粘土	良	
204	SD1002	土師器	小型丸底壺	7.8	—	(2.2) 厚底	厚底	7.0mm/6cm底 内壁	7.0mm/6cm底 外壁	1~3mmの石英、0.5mm以下の白色粘土、赤色粘土	良	
205	SD1002	土師器	小型丸底壺	—	—	(5.7) ナデ	ナデ、ヘラナデ	7.0mm/4cm底 内壁	7.0mm/1厘米 外壁	3mmの石英、0.5mm以下の白色粘土	良	
206	SD1002	土師器	小型丸底壺	—	—	(4.6) ナデ、指オサエ	ナデ、指オサエ後にナデ	7.0mm/7cm底 内壁	7.0mm/7cm底 外壁	1mm以下の石英、0.5mm以下の金剛石	良	接合痕
207	SD1002	土師器	小型丸底壺	—	(4.3)	(2.2) ナデ	指オサエ、西ナデ	SD12/1墨 内壁	SD12/1墨 外壁	2mm以下の石英、黑色粘土、赤色粘土	良	
208	SD1002	土師器	壺	—	—	(3.8) ナデ、ヘラナデ	指ナデ、厚底	SD1002/8cm底 内壁	SD1002/8cm底 外壁	3mm以下の石英、白色粘土、赤色粘土	良	
209	SD1002	土師器	壺	(14.7)	—	4.9 ハケ	ナデ	SD1002/3cm底 内壁	SD1002/3cm底 外壁	3mm以下の石英、白色粘土、赤色粘土	良	
210	SD1002	土師器	壺	—	—	(3.1) ナデ、指オサエ	ナデ	7.0mm/4cm底 内壁	7.0mm/1厘米 外壁	1~3mmの石英、0.5mm以下の白色粘土	良	
211	SD1002	土師器	壺	(11.6)	—	(5.6) ナデ	ナデ	7.0mm/3cm底 内壁	7.0mm/2cm底 外壁	0.5mm以下の白色粘土、赤色粘土、黄色粘土	良	接合痕
212	SD1002	土師器	壺	(14.6)	—	(7.6) ナデ、指オサエ	ヘラナデ後にナデ、ヘラナデ削り	SD1002/3cm底 内壁	SD1002/3cm底 外壁	0.5mm以下の白色粘土、白色粘土	良	ヘラの押圧痕
213	SD1002	土師器	壺	(14.6)	—	(3.6) ナデ、ハケ	ナデ	SD1002/2cm底 内壁	SD12/2cm底 外壁	3mmの石英、0.5mm以下の白色粘土	良	
214	SD1002	土師器	高杯	(6.6)	—	(5.6) 指壓痕、厚底	厚底	SD1002/3cm底 内壁	SD1002/3cm底 外壁	3mmの石英、黑色粘土、赤色粘土	良	接合痕
215	SD1002	土師器	高杯	—	—	(8.4) ナデ	波目、ナデ	SD1002/6cm底 内壁	SD1002/6cm底 外壁	3mm以下の石英、黑色粘土	良	接合痕2箇所、孔隙保存
216	SD1002	土師器	高杯	—	—	(8.6) 厚底	厚底、ヘラ削り	SD1002/6cm底 内壁	SD1002/4cm底 外壁	3mm以下の石英、白色粘土、赤色粘土	良	孔隙保存
217	SD1002	土師器	高杯	—	—	(6.2) 厚底	厚底	SD1002/1厘米 内壁	SD1002/4cm 外壁	3mm以下の石英、白色粘土、黑色粘土	良	孔隙保存
218	SD1002	土師器	高杯	—	(9.2)	(5.6) 厚底	厚底 (ヘラ削りが入る 部位保存)、波目	SD1002/6cm底 内壁	SD1002/6cm底 外壁	3mm以下の石英、黑色粘土	良	
219	SD1002	土師器	高杯	—	(9.9)	(2.1) 厚底	厚底	SD1002/3cm底 内壁	SD1002/4cm底 外壁	3mm以下の石英、黑色粘土、赤色粘土	良	
220	SD1002	土師器	壺	—	—	(3.8) ナデ	ナデ	SD1002/2cm底 内壁	SD1002/2cm底 外壁	3mm以下の石英、白色粘土	良	
221	SD1002	供生土器	壺	—	—	(3.2) ヘラ剥き洗濯4回、ナ ダ	厚底	SD1002/6cm底 内壁	SD1002/6cm底 外壁	3mm以下の石英、黑色粘土、赤色粘土	良	
222	SD1002	供生土器	壺	—	—	(4.4) ナデ、ヘラ剥き洗濯	ナデ	SD1002/6cm底 内壁	SD1002/2cm底 外壁	2~3mmの石英、1mm以下の白色粘土	良	
223	SD1002	供生土器	壺	—	—	(3.6) ナデ、ヘラ剥き洗濯	ナデ	SD1002/4cm底 内壁	SD1002/1厘米 外壁	3mmの石英、0.5mm以下の白色粘土、黑色粘土	良	
224	SD1002	供生土器	壺	—	—	(2.7) ナデ、削り出し要素	ナデ	SD1002/2cm底 内壁	SD1002/3cm底 外壁	3mm以下の石英、白色粘土、赤色粘土	良	
225	SD1002	供生土器	壺	—	—	(3.6) ナデ、ヘラ剥き洗濯	厚底	SD1002/3cm底 内壁	SD1002/2cm底 外壁	1~3mmの石英、0.5mm以下の白色粘土	良	
226	SD1002	供生土器	壺	—	—	(2.6) ナデ、ヘラ剥き洗濯2 回	ナデ	SD1002/2cm底 内壁	SD1002/6cm底 外壁	1~3mmの石英、1mm以下の白色粘土、黑色粘土	良	
227	SD1002	供生土器	(底部)	—	7.6	(5.2) ナデ	ナデ	SD1002/2cm底 内壁	SD1002/4cm底 外壁	3mmの石英、0.5mm以下の白色粘土、黑色粘土	良	接合痕
228	SD1002	供生土器	(底部)	—	(9.6)	(4.9) 厚底	厚底	SD1002/3cm底 内壁	SD1002/2cm底 外壁	3mm以下の石英、白色粘土、黑色粘土	良	孔隙
229	SD1002	供生土器	(底部)	—	(11.6)	(3.2) 厚底	厚底	SD1002/2cm底 内壁	SD1002/2cm底 外壁	1~3mmの石英、白色粘土、黑色粘土	良	
230	SD1002	供生土器	壺	—	(11.2)	(3.6) ナデ	ナデ	SD1002/6cm底 内壁	SD1002/6cm底 外壁	3mm以下の石英、白色粘土	良	
231	SD1002	供生土器	(底部)	—	(14.6)	(4.6) 厚底	厚底	SD1002/1cm底 内壁	SD1002/2cm底 外壁	2~3mmの石英、1mm以下の白色粘土、黑色粘土	良	
232	SD1002	供生土器	壺	(21.6)	—	(5.6) 回転ナデ	回転ナデ	SD1002/6cm底 内壁	SD1002/6cm底 外壁	0.5mm以下の白色粘土	良	
233	SD1002	供生土器	壺	—	(19.8)	(2.1) 回転ナデ	回転ナデ	SD1002/6cm底 内壁	SD1002/6cm底 外壁	0.5mm以下の白色粘土	良	
234	SD1002	土師瓦	瓦	—	—	(4.6) 厚底	厚底	SD1002/4cm底 内壁	SD1002/4cm底 外壁	0.5mm以下の白色粘土	良	

土器観察表 (6)

測定番号	測定名	種類	基準	直径 (cm)		測量		長さ		形状	断面	構造	備考
				外側	内側	外側	内側	外側	内側				
255 SP1006	直筒型	(底部)	—	(20.8)	(4.3)	厚底	厚底	2.037/4浅黄	2.036/3Hに5mm	1mm以下の白色粘土、黑色砂	良		
256 SP1005	直筒型	杯	—	(10.4)	(1.7)	回転ナダ	回転ナダ	96.灰	96.灰	0.5mm以下の白色粘土	良	体部から底面にかけて火煙	
257 SP1006	土師器	高杯	—	—	(7.2)	厚底	厚底 (ヘラ切りの痕)	7.037/4Hに5mm	7.036/5H	3mm以下のお石英・石英・赤色粘多量	良	底付火煙	
258 SP1009	土師器	瓶	—	—	—	指ナダ、指オサエ	—	7.036/6灰	7.037/黄	1mm以下の石英・黄玉	良好		
259 SP1008	土師質土器	瓶	—	—	(4.6)	ヨコナダ、厚底	ヨコナダ、指オサエ	10085/6黄黒	10087/4Hに5mm	1~2mmの石英・赤色粘多量	良		
260 SP1012	直筒土器	(底部)	—	7.6	(2.9)	厚底	厚底	10085/6明赤黒	10086/2灰白	1mm以下の石英・白色粘・赤色粘多量	良		
262 近世の繩柄	直筒型	便	—	—	(4.6)	平行タタキ	ハケのちナダ	96.灰	96.灰	—	—	良好	
263 近世の繩柄	直筒型	便	—	—	(2.4)	格子状タタキ	ナダ	94.灰	94.灰	1mm以下の白色粘	良		
264 近世の繩柄	土師器	便	—	—	(1.6)	ナダ	ナダ	90H/1灰白	10097/4Hに5mm	0.5mm以下の白色粘・黑色砂・金雲母	良		
265 近世の繩柄	土師器	便	—	—	(2.1)	ナダ	ナダ	7.0384/1灰灰	10084/1黒灰	3mm以下のお石英・白色粘	良		
266 近世の繩柄	土師器	高杯	—	—	(1.8)	ナダ	厚底	1007/6灰	1007/4灰	0.5mm以下の白色粘	良		
267 近世の繩柄	土師器	便	(18.6)	—	(2.2)	厚底	厚底	10088/1灰白	10088/1灰白	1~2mmの石英・赤色粘・黑色砂・赤色粘多量	良		
268 近世の繩柄	土師質土器	瓶	—	—	(5.4)	厚底	ナダ	7.0386/4Hに5mm	7.0385/1灰灰	3mm以下のお石英・白色粘	良		
269 近世の繩柄	直筒土器	便	—	—	(3.6)	厚底	厚底	7.0384/1灰灰	10083/1オーバーブ	0.5mm以下の石英・白色粘・金雲母	良		
270 近世の繩柄	直筒土器	蓋	—	—	(4.6)	ナダ、ハラ撒き沈縫3条	ナダ	10087/2に5mm	10085/2灰黄黒	1mmの石英・白色粘・黑色砂	良		
271 近世の繩柄	直筒土器	蓋	—	—	(2.9)	ハラ撒き沈縫3条、例文	—	10087/4Hに5mm	10086/4灰黄黒	0.5mm以下の白色粘少量	良		
272 近世の繩柄	直筒土器	蓋	—	—	(4.6)	厚底	ナダ	10085/2Hに5mm	1.035/3黄黒	1mmの石英・0.5mm以下の白色粘・黑色砂	良		
273 近世の繩柄	直筒土器	(底部)	—	(8.6)	(1.6)	厚底	厚底	10087/2に5mm	1.035/2灰灰	1mmの石英・白色粘・黑色砂	良		
274 第I遺構	直筒型	蓋	—	—	(2.7)	回転ナダ	回転ナダ	96.灰	92.灰白	0.5mm以下の白色粘・黑色砂	良		
275 第I遺構	直筒型	蓋	—	—	(1.8)	ナダ	ナダ	92.灰白	92.灰白	0.5mm以下の白色粘少量	良		
276 第I遺構	直筒型	蓋	(13.4)	—	(3.2)	回転ナダ	回転ナダ	96.灰	96.灰	—	—	良	
277 第I遺構	直筒型	蓋	(14.2)	—	(2.2)	回転ナダ	回転ナダ	92.灰白	92.灰白	—	—	良好	
278 第I遺構	直筒型	杯	—	(10.4)	(1.6)	回転ナダ	ナダ	96.灰	96.灰	—	—	底面内部の凹凸があり、破壊可能性がある	
279 第I遺構	直筒型	杯	—	(9.2)	(2.9)	回転ナダ、ナダ	回転ナダ	97.灰/白	97.灰/白	1mm以下の石英・石英	良	火煙	
280 第I遺構	直筒型	高杯	—	(13.6)	(3.5)	回転ナダ	回転ナダ	96.灰	97.灰	2mm以下の白色粘少量	良		
281 第I遺構	土師器	蓋	(8.8)	—	(3.2)	ナダ	ナダ	10086/6明赤黒	10086/6明赤黒	1mmの石英・0.5mm以下の白色粘・黑色砂	良		
282 第I遺構	土師器	蓋	(12.8)	—	(4.4)	厚底	厚底	7.0386/6灰	7.0385/6明赤黒	0.5mm以下の白色粘・赤色粘	良		
283 第I遺構	土師器	便	(13.4)	—	(3.3)	ナダ	ナダ	10085/6明赤黒	10085/3Hに5mm	1mmの石英少量、0.5mm以下の白色粘・黑色砂	良		
284 第I遺構	土師器	高杯	—	—	(3.6)	ハケ	ハケ後にナダ	7.0387/4灰	10087/4灰	1mm以下の石英・白色粘・赤色粘多量	良		
285 第I遺構	土師器	高杯	—	—	(2.2)	ナダ	ナダ	10086/6灰	10085/6明赤黒	1mmの石英・0.5mm以下の白色粘・黑色砂	良	結合板	
286 第I遺構	土師器	高杯	—	—	(6.2)	厚底	紺り目、厚底	10088/4灰黄黒	10088/3灰黄黒	3mm以下の石英・白色粘・黑色砂・赤色粘	良		
287 第I遺構	土師器	製塩土器	(3.2)	(2.3)	ナダ	ナダ	ナダ	7.0388/3灰黄黒	7.0388/2灰白	1mmの石英・0.5mm以下の白色粘	良		
288 第I遺構	直筒土器	便	—	—	(3.4)	ハラ撒き沈縫、厚底	厚底	10086/1灰白	10085/8黄黒	1mm以下の石英・石英	良		
289 第I遺構	直筒土器	(底部)	—	7.6	(2.7)	厚底	厚底	10085/6明赤黒	10087/3Hに5mm	1mm以下の石英・白色粘・赤色粘多量	良		
290 第I遺構	直筒土器	(底部)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表5 石器観察表

編文 番号	遺構名 層位名	種類	量(㎝)			重さ(g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
15	SK1001	石頭尖削器	2.6	2.2	0.5	1.4	サスカイト	
16	SK1001	二次加工のある鋸片	(1.9)	(4.1)	0.5	3.2	サスカイト	
17	SK1001	細削り斧	(6.0)	(4.75)	1.05	114.8	緑色碧玉	
52	SK1002	石鏨	1.7	1.1	0.3	0.5	サスカイト	半晶式
53	SK1002(上層)	石鏨	2.6	1.95	0.4	1.8	サスカイト	半晶式
54	SK1002(中層)	細削り鋸片のある鋸片	(4.1)	(5.0)	1.2	20.1	サスカイト	半晶式
55	SK1002(下層)	スクレーパー	(4.5)	(5.1)	0.9	24.1	サスカイト	
67	SK1001+1005 (上層)	石鏨	2.2	2.4	0.15	1.5	サスカイト	圓形
98	SD1001_1.+中層	石鏨	1.6	1.7	0.2	0.3	サスカイト	半晶式
99	SD1001_1.+中層	石鏨	1.6	1.9	0.25	0.5	サスカイト	半晶式
100	SD1001_1.+中層	石鏨	2.3	1.6	0.3	1.3	サスカイト	半晶式
101	SD1001_1.+中層	石鏨	2.0	1.25	0.3	1.0	サスカイト	半晶式
102	SD1001_1.+中層	石鏨	(2.3)	(2.0)	0.3	1.7	サスカイト	半晶式
103	SD1001_1.+中層	石鏨	2.6	1.6	0.5	2.1	サスカイト	半晶式
104	SD1001_1.+中層	石鏨	(2.2)	(2.2)	0.5	2.0	サスカイト	半晶式
105	SD1001_1.+中層	石鏨	2.6	1.6	0.5	2.1	サスカイト	半晶式
106	SD1001_1.+中層	石鏨	2.6	1.7	0.25	1.4	サスカイト	半晶式
107	SD1001_1.+中層	石鏨	1.8	1.25	0.3	0.9	サスカイト	半晶式
108	SD1001_1.+中層	石鏨	2.4	1.05	0.3	0.9	サスカイト	半晶式
109	SD1001_1.+中層	石鏨	2.0	1.6	0.4	0.9	サスカイト	半晶式
110	SD1001_1.+中層	石鏨	2.0	1.75	0.35	0.8	サスカイト	半晶式
111	SD1001_1.+中層	石鏨	(1.9)	(2.2)	0.5	1.6	サスカイト	半晶式
112	SD1001_1.+中層	石頭尖削器	(1.5)	(2.0)	0.5	1.9	サスカイト	
113	SD1001_1.+中層	石鏨	3.5	1.3	0.3	2.4	サスカイト	圓形
114	SD1001_1.+中層	打製石斧	(3.5)	(3.4)	0.7	11.2	サスカイト	使用痕あり
115	SD1001_1.+中層	スクレーパー	(2.8)	(3.7)	0.5	6.2	サスカイト	
116	SD1001_1.+中層	スクレーパー	(4.2)	(2.9)	1.1	14.6	サスカイト	
117	SD1001_1.+中層	二次加工のある鋸片	(2.2)	(3.6)	0.7	4.1	サスカイト	
144	SD1001_下層	石鏨	2.5	1.25	0.45	1.6	サスカイト	半晶式
145	SD1001_下層	石鏨	2.4	2.0	0.7	2.6	サスカイト	圓形
146	SD1001_下層	石鏨	2.65	1.55	0.3	0.6	サスカイト	圓形, 刃削痕有
147	SD1001_下層	石鏨	1.6	1.0	0.3	0.4	サスカイト	半晶式
148	SD1001_下層	石鏨	(1.8)	(1.6)	0.3	1.0	サスカイト	半晶式
149	SD1001_下層	石鏨	2.1	1.5	0.4	0.6	サスカイト	半晶式
150	SD1001_下層	石鏨	2.5	1.4	0.3	0.7	サスカイト	半晶式
151	SD1001_下層	石鏨	4.0	1.6	0.5	2.6	サスカイト	半晶式
152	SD1001_下層	石鏨	2.5	1.7	0.45	1.3	サスカイト	半晶式
153	SD1001_下層	石頭尖削器	2.7	2.1	0.3	1.6	サスカイト	
154	SD1001_下層	石頭尖削器	(3.9)	(3.1)	0.7	5.6	サスカイト	
155	SD1001_下層	石鏨	2.4	2.4	0.8	2.6	サスカイト	圓形
156	SD1001_下層	石鏨	2.4	2.1	0.8	2.6	サスカイト	圓形
157	SD1001_下層	石鏨	(3.4)	(2.7)	0.8	2.9	サスカイト	圓形
158	SD1001_下層	打製石斧	(6.6)	(6.2)	1.3	20.8	サスカイト	使用痕あり
159	SD1001_下層	打製石斧	(4.9)	(6.0)	0.6	18.9	サスカイト	
160	SD1001_下層	スクレーパー, sp.	3.15	1.0	0.7	6.9	サスカイト	
161	SD1001_下層	二次加工のある鋸片	(3.1)	(4.4)	1.0	9.6	サスカイト	
162	SD1001_下層	スクレーパー	(2.1)	(2.0)	0.8	3.6	サスカイト	
163	SD1001_下層	スクレーパー	(2.6)	(3.8)	1.2	9.1	サスカイト	
164	SD1001_下層	二次加工のある鋸片	2.15	2.45	0.45	2.2	サスカイト	
178	SD1001	石鏨	1.9	1.85	0.3	1.0	サスカイト	圓形
179	SD1001	石鏨	2.1	1.7	0.35	1.1	サスカイト	半晶式
180	SD1001	石鏨	2.6	1.8	0.6	1.2	サスカイト	半晶式
181	SD1001	石鏨	2.2	2.4	0.4	2.2	サスカイト	
182	SD1001	圓形石器	3.4	2.9	0.25	7.9	サスカイト	
183	SD1002	石鏨	2.05	1.2	0.3	0.6	サスカイト	半晶式
184	SD1002	石鏨	2.2	1.6	0.3	0.7	サスカイト	半晶式
185	SD1002	石鏨	1.9	1.2	0.4	0.7	サスカイト	半晶式
186	SD1002	石鏨	1.4	1.9	0.5	1.5	サスカイト	半晶式
187	SD1002	石鏨	2.9	2.5	0.7	2.9	サスカイト	半晶式
188	SD1002	石鏨	3.6	1.0	0.5	2.6	サスカイト	半晶式, 刃削痕有
189	SD1002	石鏨	(4.4)	1.5	0.45	2.9	サスカイト	圓形, 半晶式
190	SD1002	石頭尖削器	2.6	0.6	0.4	0.6	サスカイト	
191	SD1002	石頭尖削器	1.8	2.0	0.3	1.6	サスカイト	氯化物著しい
192	SD1002	石頭尖削器	2.9	1.7	0.4	1.7	サスカイト	
193	SD1002	石頭尖削器	(2.9)	(2.4)	0.8	4.4	サスカイト	
243	SD1002	石頭尖削器	3.1	2.5	0.4	3.7	サスカイト	
244	SD1002	石鏨	2.7	1.5	0.7	3.6	サスカイト	圓形
245	SD1002	スクレーパー	(2.1)	(2.0)	0.7	2.7	サスカイト	
246	SD1002	細削り鋸片のある鋸片	(3.4)	(2.0)	0.35	1.6	サスカイト	
247	SD1002	細削り鋸片のある鋸片	4.45	1.9	0.25	6.0	サスカイト	
248	SD1002	石頭尖削器	(3.9)	(2.5)	0.4	3.4	サスカイト	石頭?, 残根有
249	SD1002	石鏨	(7.0)	(1.8)	1.0	15.1	細削り	
250	SD1002	玉串	(10.3)	(7.3)	1.30	171.4	綠色玉	
251	SD1002	石刀	(6.4)	(4.15)	(1.85)	58.3	綠色玉	使用痕有
281	SD2024	石鏨	2.0	1.6	0.3	0.9	サスカイト	半晶式
291	第1遺構出	石鏨	2.1	0.9	0.25	0.3	サスカイト	半晶式
292	第1遺構出	石鏨	1.9	1.5	0.3	0.6	サスカイト	半晶式?
293	第1遺構出	スクレーパー	(4.7)	(4.9)	0.9	23.1	サスカイト	
294	第1遺構出	敲き石	9.6	7.6	6.2	682.7	砂岩	

写真図版

目次

写真図版 1

- 1 建物本体南半 第1遺構面全景（東から）
- 2 建物本体北半 第1遺構面全景（南西から）

写真図版 2

- 1 SK1001 遺物出土状況（西から）
- 2 SK1001 断面（西から）

写真図版 3

- 1 SK1002 遺物出土状況（西から）
- 2 SK1002 断面（西から）

写真図版 4

- 1 SK1003 断面（南西から）
- 2 SK1004 断面（南西から）

写真図版 5

- 1 SX1004 完掘状況（南西から）
- 2 SX1005 断面（南西から）

写真図版 6

- 1 SD1001・1002 完掘状況（南から）
- 2 SD1001・1002 b～b' 断面（南から）
- 3 SD1001・1002 c～c' 断面（南から）

写真図版 7

- 1 SD1006 完掘状況（南西から）
- 2 SD1006 断面（南西から）

写真図版 8

- 1 建物本体南半 第2遺構面全景（南東から）
- 2 SD2001 a～a' 断面（南東から）

写真図版 9

- 1 SK1001 出土遺物集合写真
- 2 SK1002 出土遺物集合写真

写真図版 10

- 1 SK1001 出土土器
- 2 SK1001 出土土器
- 3 SK1001 出土土器
- 4 SK1001 出土土器
- 5 SK1002 出土土器
- 6 SK1002 出土土器

写真図版 11

- 1 SK1002 出土土器
- 2 SK1002 出土土器
- 3 SK1002 出土土器
- 4 SK1001 出土土器
- 5 SK1005・SP1006 出土土器

写真図版 12

- 1 SD1001 出土土器
- 2 SD1001 出土土器
- 3 SD1002 出土土器
- 4 SD1002 出土土器
- 5 SD1002・第1遺構面出土石器

写真図版 13

- 1 SD1001 出土石器
- 2 SD1001 出土石器

写真図版 14

- 1 SD1002 出土石器
- 2 SK1001・SK1002・SK1005・第1遺構面・SP2024 出土石器
- 3 SD1002 出土石器
- 4 SD1001 出土動物骨



1 建物本体南半 第1遺構面全景（東から）



2 建物本体北半 第1遺構面全景（南西から）



1 SK1001 遺物出土状況（西から）



2 SK1001 断面（西から）



1 SK1002 遺物出土状況（西から）



2 SK1002 断面（西から）



1 SK1003 断面（南西から）



2 SK1004 断面（南西から）



1 SX1004 完掘状況（南西から）



2 SX1005 断面（南西から）



1 SD1001・1002 完掘状況（南から）



2 SD1001・1002 b～b' 断面（南から）



3 SD1001・1002 c～c' 断面（南から）



1 SD1006 完掘状況（南西から）



2 SD1006 断面（南西から）



1 建物本体南半 第2造構面全景（南東から）



2 SD2001a ~ a' 断面（南東から）





1 SK1001 出土土器



4 SK1001 出土土器



2 SK1001 出土土器



5 SK1002 出土土器



3 SK1001 出土土器



6 SK1002 出土土器



1 SK1002 出土土器



2 SK1002 出土土器



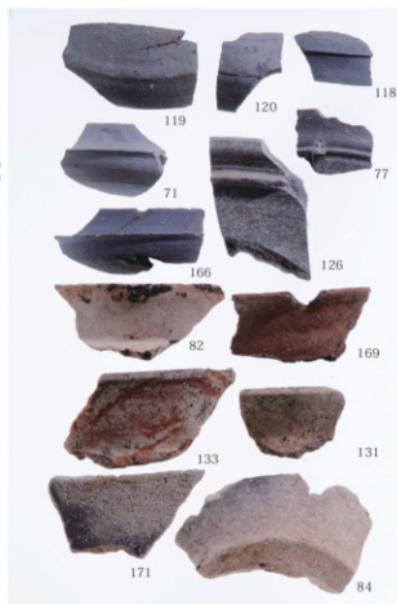
3 SK1002 出土土器



4 SK1001 出土土器



5 SK1005・SP1006 出土土器



1 SD1001 出土土器



3 SD1002 出土土器



2 SD1001 出土土器



4 SD1002 出土土器



5 SD1002・第1遺構面出土石器



1 SD1001 出土石器



2 SD1001 出土石器



1 SD1002 出土石器



2 SK1001・SK1002・SK1005・第1道横面・SP2024 出土石器



3 SD1002 出土石器



4 SD1001 出土動物骨

報 告 書 抄 錄

川島本町葬祭会館建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

川島本町遺跡

平成 29 年 9 月 30 日

編 集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号
発 行 株式会社ベルモニー
高松市教育委員会
印 刷 有限会社中央ファイリング